

いわ ぶち
岩 淵 遺 跡

2001

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域社会の創造に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い、地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な場所についての発掘調査を行い、その結果を記録に留めて、私たちの郷土山口を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、県営ほ場整備事業（担い手育成型・岩淵地区）に先立ち、防府市台道地内に所在する岩淵遺跡について、山口県教育委員会並びに山口県農林部からの委託を受けて山口県教育財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の調査では、山口県内では初めての確認例となる瓦質土器の窯跡とそれに関連する数多くの遺構・遺物を発見し、当地が鎌倉時代から室町時代にかけて、瓦質土器の一大生産地であったことが明らかになりました。これは、山口県の中世史を解明する上で、きわめて注目される成果であると確信しています。

貴重な資料を記録した本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究の資料や、郷土史の基礎資料等として、有効に活用されることを願うものであります。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山口県教育財団

理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、山口県防府市大字台道に所在する岩淵遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県営ほ場整備事業（担い手育成型・岩淵地区）に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県教育委員会並びに山口県農林部の委託を受け実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 指導主事 大村 秀 典
指導主事 河村 悟 史
指導主事 林 修 司
文化財専門員 岩 崎 仁 志（山口県教育庁文化財保護課）
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口農林事務所農村整備部、防府市大道土地改良区、並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書に掲載した第1図の地形図は国土地理院発行の25000分の1の地形図を、第2図の調査区設定図は山口農林事務所農村整備部提供の地図を、ともに複製使用したものである。
- 6 本書に使用した方位は国土座標（第3座標系）の北で示し、標高は海拔標高である。
- 7 出土遺物のうち、石器の石材については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦 氏に鑑定を依頼した。なお、石質鑑定は表面観察によるものである。
- 8 本書に使用した土色の色調の標記は、Munsell方式による。（農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』）
- 9 本書の遺構略号は、次のとおりである。

SB：建物跡 SP：柱穴 SD：溝状遺構 SK：土坑 ST：墓 SF：窯跡
- 10 本書の実測図・写真の製作及び本書の執筆・編集は、大村・河村・林・岩崎が共同で行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯と調査の概要	2
III 遺構	7
1. 掘立柱建物跡	7
2. 埋甕遺構	14
3. 土坑	16
4. 墓	21
5. 竈跡	22
IV 遺物	23
V まとめ	46

図版目次

図版1 岩濶遺跡遠景(西より) 岩濶遺跡遠景(南より)	
図版2 岩濶遺跡全景 竈跡群と中世墓(西より)	
図版3 南西側建物群 トレンチ設定状況(東より)	
図版4 SP-1遺物出土状況 SP-2遺物出土状況 SP-3遺物出土状況 SP-7遺物出土状況 SP-9遺物出土状況 SP-10遺物出土状況 SP-14遺物出土状況 SP-16遺物出土状況	
図版5 SP-20遺物出土状況 SP-21遺物出土状況 SP-25遺物出土状況 SP-26遺物出土状況 SP-28遺物出土状況 SP-29遺物出土状況 SP-30遺物出土状況 SP-31遺物出土状況	
図版6 SP-44遺物出土状況 SP-47遺物出土状況 SP-48遺物出土状況 SP-49遺物出土状況 SP-55遺物出土状況 SP-56遺物出土状況 SP-57遺物出土状況 SP-58遺物出土状況	
図版7 SP-59遺物出土状況 SP-1442遺物出土状況 SD-5遺物出土状況 SD-9遺物出土状況 SK-24遺物出土状況 SK-25遺物出土状況 SK-52遺物出土状況 SK-34遺物出土状況	
図版8 SK-44遺物出土状況 SK-45遺物出土状況 SK-47遺物出土状況 SK-51遺物出土状況 SK-89遺物出土状況 SK-89遺物出土状況 SK-29竈壁出土状況 SK-93完掘	
図版9 SK-94遺物出土状況 SK-94遺物出土状況 SF-2・3・SK-93完掘 SK-90・91完掘 ST-1遺物出土状況 ST-1遺物出土状況 ST-2遺物出土状況 ST-2遺物出土状況	
図版10 ST-2完掘(西より) SF-1土層断面(西より)	
図版11 SF-4焼土出土状況(西より) SF-4完掘(西より)	
図版12 竈跡群(南西より) 竈跡群(北西より)	
図版13 柱穴出土遺物	

- 図版14 柱穴出土遺物
 図版15 柱穴出土遺物
 図版16 溝出土遺物 SK-92出土遺物
 図版17 SK-93・94出土遺物
 図版18 SK-94出土遺物
 図版19 SK-94出土遺物 土坑出土遺物
 図版20 埋甕遺構出土遺物 SK-34出土遺物 SK-89出土遺物
 図版21 SK-89出土遺物 SK-36出土遺物 SK-45出土遺物
 図版22 SK-33出土遺物 SK-29出土遺物 SK-51出土遺物 SK-44出土遺物 SK-47出土遺物
 図版23 SK-25出土遺物 SK-68出土遺物 ST-1出土遺物 ST-2出土遺物
 図版24 SF-1・4出土遺物
 図版25 窯体 土鍾

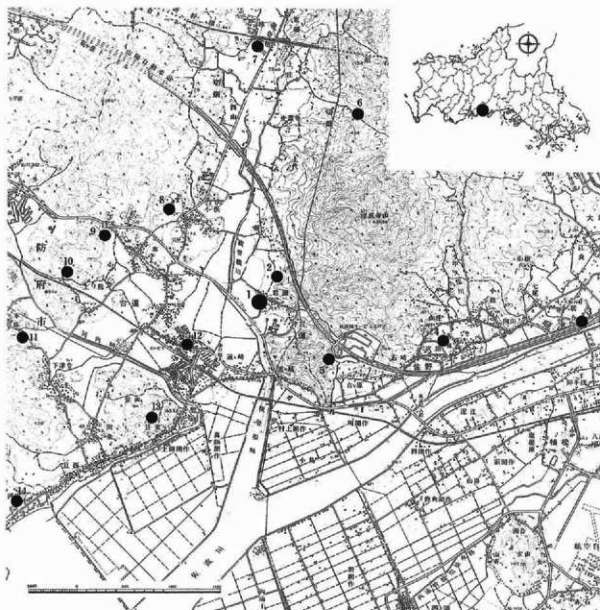
挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第21図 柱穴出土遺物実測図(1)	25
第2図 調査区設定図	4	第22図 柱穴出土遺物実測図(2)	27
第3図 遺構配置図	5・6	第23図 柱穴出土遺物実測図(3)	28
第4図 柱穴遺物出土状況図(1)	9	第24図 溝出土遺物実測図	28
第5図 柱穴遺物出土状況図(2)	10	第25図 SK-90出土遺物実測図	29
第6図 柱穴遺物出土状況図(3)	11	第26図 SK-91出土遺物実測図	29
第7図 柱穴遺物出土状況図(4)	12	第27図 SK-92出土遺物実測図	29
第8図 柱穴遺物出土状況図(5)	13	第28図 SK-93出土遺物実測図	31
第9図 埋甕遺構実測図	14	第29図 SK-94出土遺物実測図(1)	33
第10図 土坑遺物出土状況図	15	第30図 SK-94出土遺物実測図(2)	35
第11図 SK-29実測図	17	第31図 SK-94出土遺物実測図(3)	35
第12図 SK-65・66土層断面図	17	第32図 土坑出土遺物実測図(1)	36
第13図 土坑実測図	18	第33図 土坑出土遺物実測図(2)	37
第14図 ST-1実測図	19	第34図 土坑出土遺物実測図(3)	39
第15図 ST-2実測図	19	第35図 土坑出土遺物実測図(4)	41
第16図 SF-1実測図	20	第36図 ST-1・2出土遺物実測図	42
第17図 SF-2実測図	20	第37図 SF-1出土遺物実測図	43
第18図 SF-3実測図	21	第38図 SF-4出土遺物実測図	44
第19図 SF-4実測図	22	第39図 土鍾実測図	45
第20図 窯跡群平面図	23		

I 遺跡の位置と環境

岩淵遺跡の所在する岩淵地区は、防府市中心部から西方約8km、楞嚴寺山南西の山麓、横曽根川東側の段丘面上にある。岩淵地区の西側に広がる低地は、古くは干潟であったと考えられ、建徳2年(1371)九州探題今川貞世が『道ゆきふり』の中で下向の際の記述として「北に沿いて、いささかなる山路(佐野峠)になりて、岩淵というところに出たり、此方もなおなた嶋瀧とて速き干瀧なり。云々」と記しており、中世においては、岩淵の集落は、今とは異なり横曽根川河口の入り江にあったことがわかる。また、中世までは、旧山陽道は、南東側の佐野峠から岩淵を通り北上し、原から渡し舟で小俣上がり、市に通じ、さらには鋤銭司へと至る経路であったと考えられている。

本遺跡の南西側に隣接して、6世紀後半代の築造と推定される岩淵古墳があり、中世より岩淵地区の祭祀行事(大歳講)の社様として信仰の対象となっている。また、佐野峠を挟んで、東側に佐野焼の窯



- 1 岩淵遺跡 2 原遺跡 3 玉祖遺跡 4 佐野窯跡群 5 台ヶ原古墳群 6 切畑遺跡 7 切畑南遺跡 8 小俣遺跡
9 市遺跡 10 上り熊遺跡 11 下山ノ口遺跡 12 繁枝砂丘遺跡 13 柴山古墳群 14 大河内遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

がある。佐野焼は、天保12年(1841)の『防長風土注進案』に「壺焼七十軒」とあるように、江戸時代には同地一帯で広く焼かれていたことが確実であるが、中世にさかのぼる可能性もある。近世以降の主な製品は、土師質の無釉陶器と瓦質土器(焼成最終段階で松葉等を焚いて煙し、瓦質に焼成する「黒焼き」を行ったもので、水甕などの荒物と土鍋・釜・火鉢・焙烙などの小物が生産されてきた。

さて、岩淵遺跡と関連するであろう同時代の周辺遺跡をあげてみると、佐野から山陽道沿いに約1Kmほど東に行くと、玉祖神社の門前に平安～室町にかけての集落遺跡・祭祀遺跡である玉祖遺跡がある。一方、岩淵地区から横曽根川沿いに北上すると切畑南遺跡があり、13世紀頃から近世にかけて集落があったことがわかっている。そして、横曽根川を挟んでほぼ真西の低丘陵の緩斜面には、中世墓地遺跡である下山ノ口遺跡が位置している。

以上、本遺跡に関係する中世に焦点を絞り、岩淵地区とその周辺の様子を浮き彫りにしてみたが、近年になって発掘がすすんできた地域でもあり、今後の発掘成果と併せて、この地域の中世の様子が明らかになることを期待したい。

- 参考文献 御園生翁甫『防長地名考』1931 防府市教育委員会『防府市史』1960
 下中邦彦『山口県の地名(日本歴史地名体系36)』1980
 山口県教育委員会『玉祖遺跡・西小路遺跡』1983 同『生産遺跡分布調査報告書 室業』1983
 ふるさと大道を掘り起こす会『ふるさと大道』(1)1986
 『角川日本地名大辞典』編纂委員会『角川日本地名大辞典35 山口県』1988
 岩淵古墳調査団『岩淵古墳調査報告書』1997
 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター『切畑南遺跡』1999 同『切畑南遺跡 II』2000



トレンチ掘り込み作業



重機による表土除去

II 調査に至る経緯と調査の概要

山口県教育委員会は、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、山口県農林部農村整備課と事前協議を行ってきた。防府市台道の岩淵地区についても、事業施工にあたり事前調査を行い遺跡の存在が確認されたことから、工事施工上削平がやむを得ない範囲について、財団法人山口県教育財団が発掘調査を行うこととなった。対象面積は4,500㎡である。

平成12年4月当初より、山口農林事務所及び大道土地改良区と調査区の範囲等について事前の協議を重ねた結果、調査区北西側の500㎡については、作付けの都合上8月後半から調査を行うこととし、それ以外の調査区は6月26日より現地調査を開始した。調査にあたっては、まず遺構の広がり把握するためトレンチを計8本設定し、人力

により掘り下げた。その結果、調査区全域にわたり遺構を確認。特に西側中央部の遺構密度が極めて高いことが判明した。土層観察では、厚さ30cm程度の耕土直下に5cm程度の黄褐色の盤土があり、その下に、場所によっては5~50cm程度の黒褐色の遺物包含層を認めた。なお、遺構面は赤褐色及びにぶい黄褐色の砂質粘質土で、乾燥すると極めて固くなり、掘り込みには相当の困難が予想された。

7月6日から重機による表土除去を始め、10日からは、表土除去と併行して人力での遺構検出も開始。遺構密度が高いことに加えて、夏場に入って遺構面が乾燥し固くなったことから包含層の除去に苦勞し、遺構検出には予想以上に時間を要した。ほぼ、遺構検出が終了した7月27日からは、平板による1/100の遺構配置図を作成し、8月1日からようやく遺構掘り込み作業に入った。折しも、夏場の好天が続き、遺構面が固く乾き、掘り込みには大変困難を極め、常に遺構面上への十分な散水が必要であった。さらに、出土遺物が多いため個々の遺構の掘り込みに時間を要し、調査の進行は予定より大きく遅れることとなった。加えて、調査区西端の斜面際の包含層の下から、瓦質土器の窯跡と思われる遺構を数基発見し、予定期間中に調査を終えることがますます困難な状況になるに至った。

一方、作付けの都合上調査に入れなかった北西側の地区についても、8月21日から表土除去を開始した。現地形で見られる以上に旧地形の傾斜は大きく、北西側の最も厚いところでは1m以上の客土が盛られており、緩斜面を形成する遺構面で確認できた遺構密度は南東側に比べ薄かった。

9月に入り、暑さもようやく峠を越えたところで、作業員の努力で遺構の掘り込みもベースアップし、8割程度遺構の掘り込みが終わった10月14日には現地説明会を実施。この現地説明会は、同時期に並行して調査が行われていた隣接する原遺跡からも、岩淵遺跡と同様の瓦質土器の窯跡が発見されていたことから、原遺跡と合同で行い、好天にも恵まれて200名を越える見学者の来訪を得ることができた。

ところで、当初の予定では10月下旬に調査を終えるはずであったが、予定期間内に調査を終了することは既に不可能となっていた。そこで、山口農林事務所と協議の上、調査期間を1ヶ月近く延長することで了解を得た。11月9日には無事遺跡の空中撮影も終え、10月19日から始めていたグリッド実測も14日に終了。残っていた遺構の個別実測を終えた後、11月17日によりやく現地での全調査が終了した。調査の終盤は、まことに憊々しい日々であったが、作業員の献身的な協力で無事調査を終えることができて、調査員一同大変感謝している。



遺構の掘り込み作業



現地説明会風景



第2図 調査区設定図



第3図 遺構配置図

III 遺 構

防府市内の平地の大部分は、主に近世以降の干拓により形成されたものであるが、岩淵遺跡の所在する大道地域には、同地域を南北に貫流して佐波川河口に合流する横曽根川の兩岸に河岸段丘が見られ、当遺跡はその東側の段丘上（標高7m前後）に所在する。調査区の南西に隣接する岩淵古墳の辺りから調査区の北西側にかけては、比高差が5m余りもある急な崖面となっており、これは、当地が段丘であることを見事に象徴するものである。現在は水田となっているこの崖面直下の低地は、中世以前は横曽根川の河口にあたり、当時の岩淵の集落は同川河口に広がる入り江に面していたのである。

一方、調査前の現況が水田であった調査区一帯は、現在の岩淵の集落の中心部がある北東側を最高位とするものの、外見上はある程度平坦面を形成していた。しかし、表土を除去すると、実際の旧地形は南東側から北西側に向かってかなり傾斜しており、北西側の平坦面は、近世段階での水田化の際に、相当量の客土を盛って造成されたことが分かった。

表土除去後に確認した遺跡周辺の基盤土は、いわゆる「宇部砂礫層」に相当するものであるが、初蔵寺山系の黒雲母花崗岩を主とするその上層は、長年にわたる風化作用と熱作用によって、赤褐色及び黄褐色の砂質粘質土と化している。遺構は、その赤褐色及び黄褐色砂質粘質土に掘り込まれており、埋土は、褐色もしくは黒褐色土が中心である。また、トレンチの土層観察では、耕土及び盤土の下に、場所によって厚さの差はあるものの、ほぼ全面にわたり遺物包含層が確認できた。これは、多量に客土が盛られていた北西側ほど厚かったことから、近世段階で付近一帯が水田化された際に、遺構面が相当大規模な削平を受けたことを窺わせるものである。

さて、今回の調査で検出された遺構は、柱穴約3000（そのうち遺物が出土した柱穴は1680）の他、復元できた掘立柱建物跡31棟、建物に伴う溝状遺構13条、土坑88基、埋甕遺構3基、粘土探掘坑2基、墓2基、山口県内では初めての確認例となる瓦質土器窯跡4基などがある。遺構配置図からも一目瞭然のように、調査面積に対する遺構密度は極めて高い。また、これらの遺構と遺構面からは、コンテナにして実に約100箱分という大量の遺物が出土しているが、若干の鉄製品と土銚を除いては、全て中世の土師器・瓦質土器・陶磁器で、古代以前及び近世以降の遺物は出土していない。

1. 掘立柱建物跡

調査区内からは、柱穴と見られる小ピットが約3000検出された。分布密度は、調査区の中央部から南東側にかけての平坦面が特に高く、北西側は低い。密度の高い区域は柱穴の多くが隣接、相互に切り合い関係があるものも多く、建物の復元は相当困難であった。これは、長期間にわたって幾度もの建て替えが行われたことによるものであり、結果的に31棟を建物として復元したが、それ以外にも建物を構成しそうな柱穴配置が多いことを認めざるを得ない。

復元した建物は、調査区中央北側の3棟（SB-26～28）と北端のSB-31を除く他の27棟は、全て棟方向が同じ（ほぼ東西もしくは南北）である。建物規模は4×2間が1棟、3×3間が1棟、3×2間が12棟、2×2間が7棟、2×1間が7棟、1×1間が1棟、3×2間と推定される建物が2棟である。桁行長と梁行長をかけた床面の平面積で見ると、最大は、SB-12の44.6㎡。他に30㎡を大きく超える大型の建物は、SB-1・17・19・21の4棟のみで、大半は20～30㎡前後（18棟）である。個々の建物の時期に

については、大部分の柱穴から土師器及び瓦質土器を中心とする遺物が多数出土しているものの、その多くは破片で、しかも摩耗していることから、決め手に欠けるきらいはあるが、ある程度時期を推定できる次の21棟について概略する。

SB-1 調査区の東端に位置する、床面積では本調査区内で3番目に大きい建物である。SP-107から13～14世紀代の瓦質土器羽釜の口縁部が出土。

SB-3 SB-1の南西に位置する比較的小さめの建物。SP-272から14～15世紀代の土師質の丹塗り播鉢、SP-23からは瓦質の土鍾(364)が出土。

SB-4 SB-3と東側が重複。SP-283から15世紀後半～16世紀前半代の土師器杯が出土していることから、SB-3より後の時期の建物と思われる。他に、SP-1444から14世紀後半代の土師器杯(52)と瓦質の土鍾(368)が、SP-1442(第8図)から瓦質土器ミニチュア壺(77)が出土。

SB-5 SB-1の西側に並ぶ建物で、SP-969から13～14世紀代の土師器皿が出土。

SB-6 SB-5と北東の1/4部分が重複するが、時期はほぼ同時期と思われる。SP-462から13～14世紀代の土師器皿と、SP-361から瓦質の土鍾(356)が出土。

SB-7 SB-6の西側に接する建物で、SP-410から13～14世紀代の土師器皿が出土。

SB-8 SB-7の西側にやや離れて位置する建物で、SB-1・5～7の4棟には後発する。SP-13から14世紀後半～15世紀前半代の土師器杯(54)と土師器皿が出土。

SB-13 調査区西側に位置する比較的大型の建物で、SP-1(第4図)の上層から15～16世紀前半代の瓦質土器鍋(63)の破片が折り重なった状態で出土。

SB-14 SB-13の北東に隣接する比較的大型の建物で、SP-20(第5図)の下層から15～16世紀代の完形の瓦質土器小型鉢(69)、SP-736から13～14世紀代の土師器皿(36)、SP-760から13～14世紀代の土師器皿(1～3)と窯体の一部が溶着した瓦質土器鍋(二次的に熱で陶器質に変化)、SP-769から13～14世紀代の土師器皿(39)が出土。

SB-15 大部分が重複するSB-14より時期的に先行するだけでなく、本調査区で最も古い時期の建物の1つである可能性を持つ。SP-15から12～13世紀代の土師器皿(10～13)が出土。

SB-16 調査区中央部東側に位置し、SP-25から13～14世紀代の土師器皿(46)、SP-904から13～14世紀代の土師器皿(37)が出土。

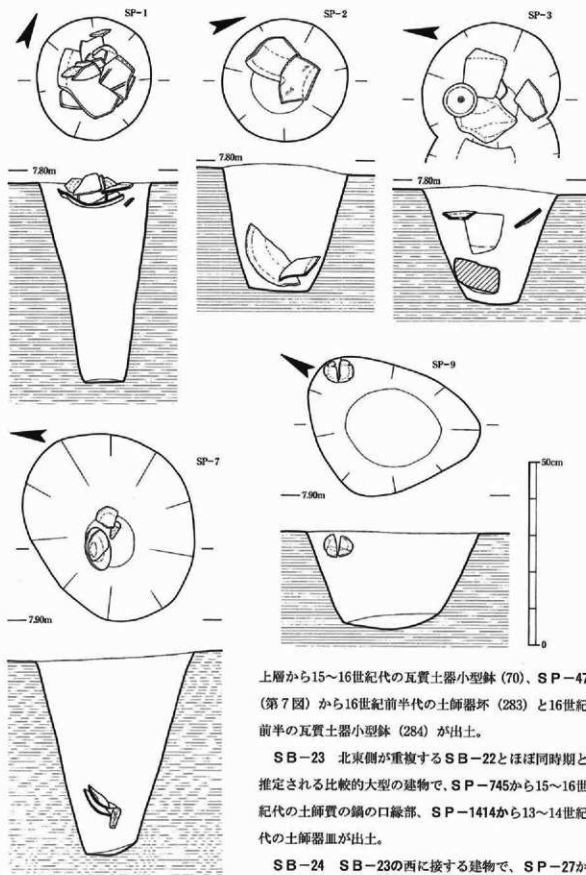
SB-17 SB-16と同位置に重複するが、一回り大きく、時期的には同時期かやや先行する可能性を持つ建物である。SP-897から13世紀代の瓦質土器羽釜の口縁部が出土。

SB-18 SB-17の西に接し、SP-1217から15～16世紀代の瓦質土器十能の把手が出土。

SB-19 南東側の一部が重複するSB-18とほぼ同時期の、本調査区で2番目に大規模な建物である。SP-1234から15世紀後半以降の瓦質土器火鉢の口縁部が出土。なお、複数の柱穴の切り合いから土坑に含めたが、SK-51(第10図)からは、15世紀後半～16世紀前半代の土師器杯(279)と12～13世紀代の青磁碗(280)が出土。

SB-20 南半分が重複するSB-19に時代的に先行する比較的小さめの建物で、SP-50から13～14世紀代の土師器皿(6～9)、SP-1068から15～16世紀代の瓦質土器脚部が出土。

SB-22 SB-19・20の西に隣接する調査区内では中規模に属する建物で、SP-30(第6図)の



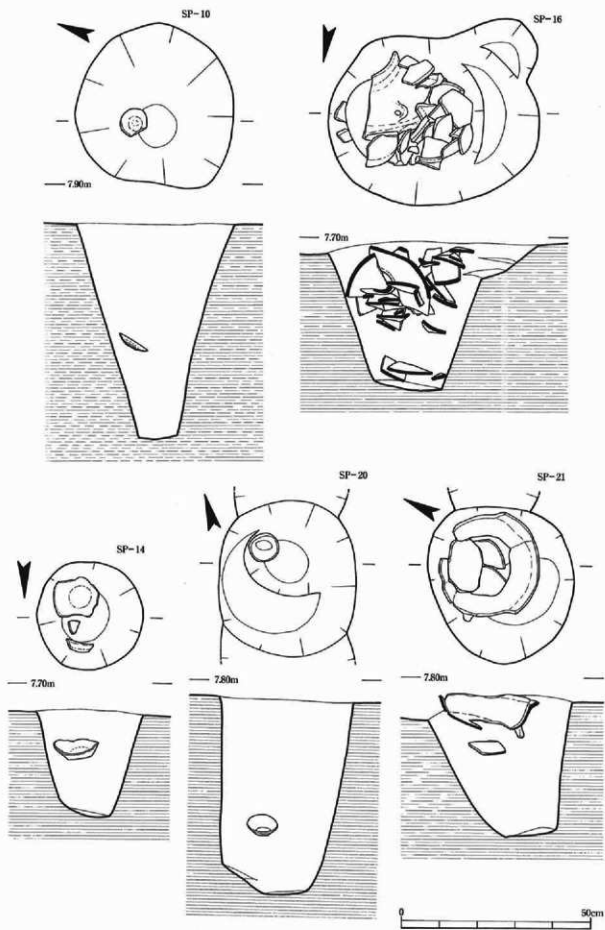
第4図 柱穴遺物出土状況図(1)

上層から15～16世紀代の瓦質土器小型鉢(70)、SP-47(第7図)から16世紀前半代の土師器環(283)と16世紀前半の瓦質土器小型鉢(284)が出土。

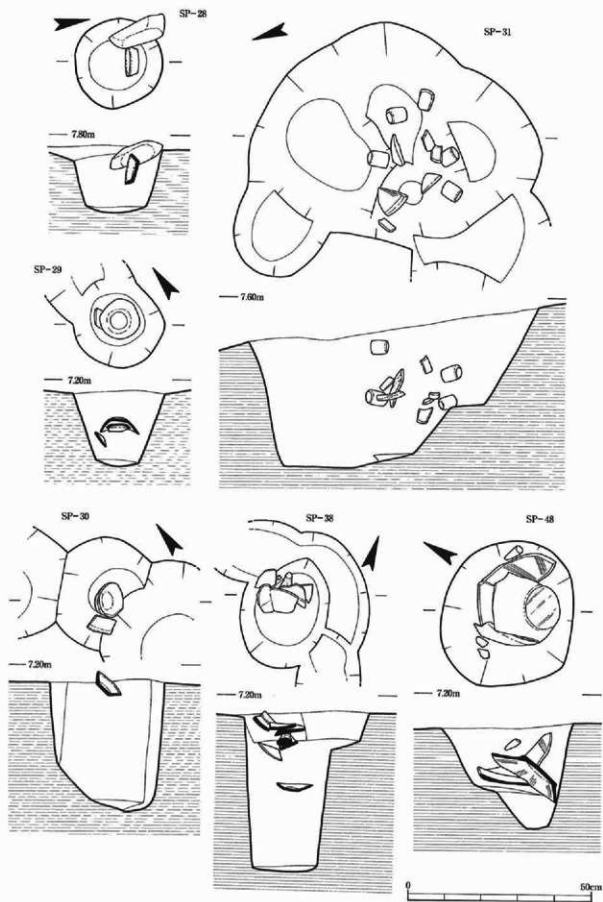
SB-23 北東側が重複するSB-22とほぼ同時期と推定される比較的大型の建物で、SP-745から15～16世紀代の土師製の鍋の口縁部、SP-1414から13～14世紀代の土師器皿が出土。

SB-24 SB-23の西に接する建物で、SP-27から13世紀代の瓦質土器羽釜(62)が出土。

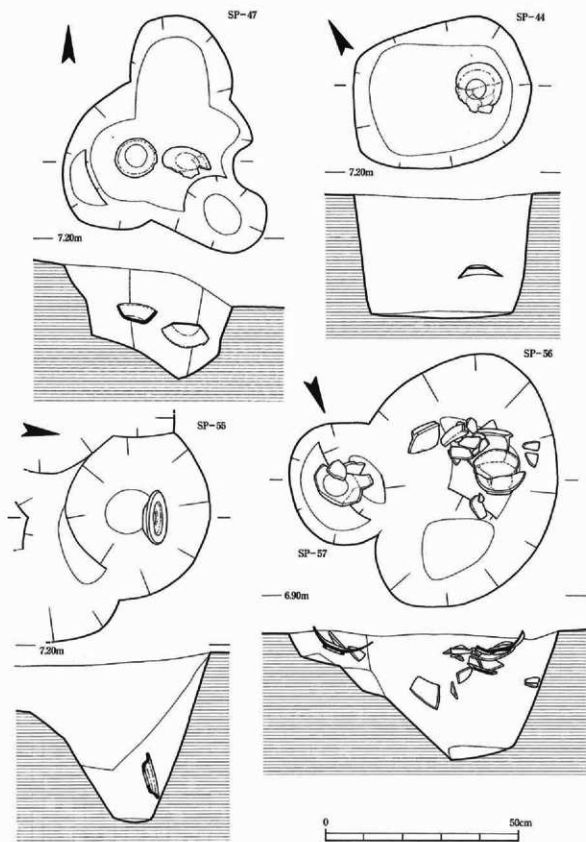
SB-25 SB-24の北に隣接し、SP-48(第6図)の中層から14世紀代の瓦質土器挿鉢(66)が底部を上



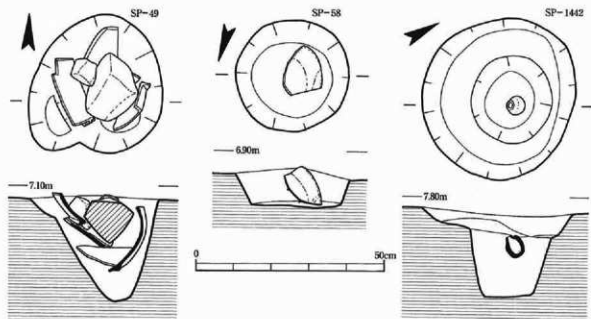
第5圖 柱穴遺物出土狀況圖 (2)



第6图 柱穴遺物出土状況図 (3)



第7圖 柱穴遺物出土狀況圖 (4)



第8図 柱穴遺物出土状況図 (5)

した状態で出土。また、SP-53から15～16世紀代の瓦質土器大甕、SP-54から15世紀以降のものと思われる瓦質土器甕が出土した。

SB-28 他とは棟方向が異なり、SP-1359から12～13世紀代の土師器皿(51)が出土。

SB-31 調査区の最北端に位置し、SP-1068から13～14世紀代の瓦質土器楕鉢が出土。

次に、復元した建物以外の、主な遺物が出土した柱穴について概略する。

SP-2 (第4図・図版4) SP-15の北西方向、SK-34の南側から検出した柱穴で、上層から瓦質土器鍋(30)と鉢(31)の一括資料が出土した。

SP-3 (第4図・図版4) SB-15の中央部で検出。上層から土師器有孔皿(74)が出土。

SP-7 (第4図・図版4) SB-15の北端に接する柱穴で、SB-15に関わる可能性も捨てきれない。底部近くから土師器皿(22)と土師器杯2点(23・24)の一括資料が出土。

SP-9 (第4図・図版4) SB-11の東側で検出。上層から土師器皿(42)が出土。

SP-10 (第5図・図版4) SB-14の北側に隣接して検出。SB-14に関わる可能性も否定できない。中層から土師器杯が出土。

SP-14 (第5図・図版4) SB-8の北西方向で検出。中位面から土師器杯(55)が出土。

SP-16 (第5図・図版4) SB-7の北側に並行して、5つの柱穴を等間隔に検出した。権列とも思われるが、北側が調査区外であることから、建物を構成する柱穴の並びである可能性が高い。その中央に位置するSP-16からは、瓦質土器の二耳甕(32)と大型の湯釜(33)が破砕された状態で出土。その大部分は上層に折り重なった状態であった。

SP-21 (第5図・図版5) SB-8の東側で検出。上層から土師器皿(35)が出土。

SP-28 (第6図・図版5) SB-21の東側で検出。上層から完形の瓦質土器小型鉢(28)と磁石(29)の一括資料が出土した。

SP-29 (第6図・図版5) SB-20の西側で検出。中層から土師器杯(17・18)が出土。

SP-31 (第6図・図版5) SB-23の北側で検出。上層から中層にかけて、完形4点 (348~351) を含む土鍾が多数出土した。

SP-38 (第6図) SB-23の東側で検出。上層から瓦質土器片、中層から土師器杯が出土。

SP-44 (第7図・図版6) SB-22の北側で検出。中層から土師器杯 (53) が出土。

SP-55 (第7図・図版6) SB-22の中央部で検出。下層から瓦質土器蓋 (74) が出土。

SP-56・57 (第7図・図版6) SB-29の中央部で検出。両柱穴は切り合い関係にあるが、時代的前後関係は不明。SP-56の上層から土師器杯 (61)、SP-57の上層から青磁碗 (80) が出土。

SP-58 (第8図・図版6) SB-28の北側に接して検出。同建物に関わる柱穴の可能性もある。浅めの柱穴で土師器杯 (60) が出土。

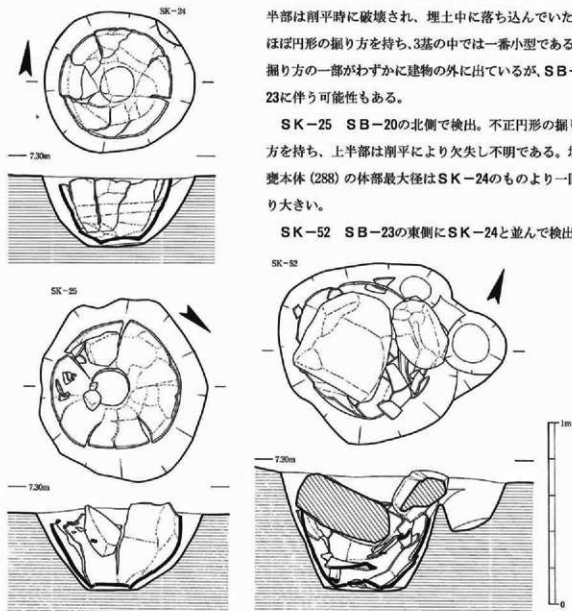
2. 埋壺遺構(第9図)

調査区内から埋壺と思われる遺構を3基検出した。

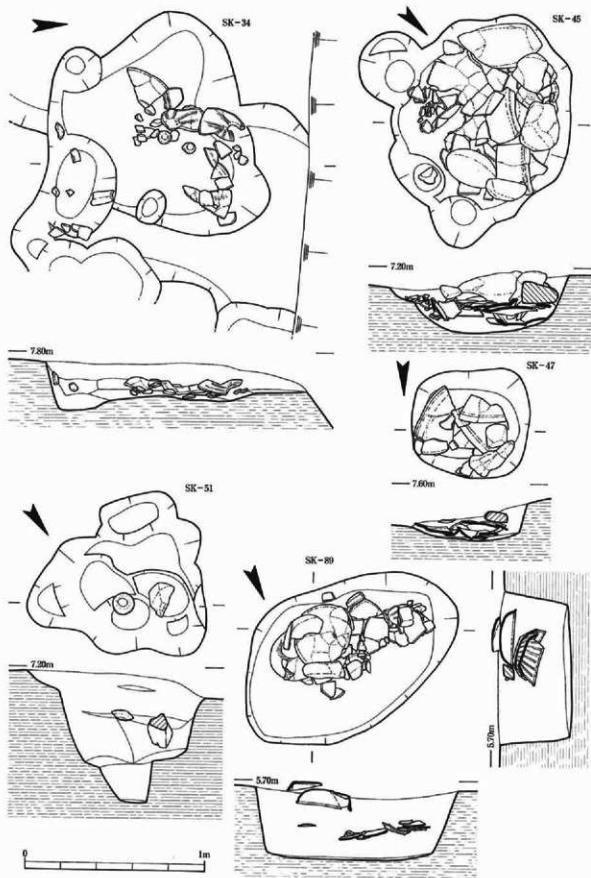
SK-24 SB-23の東側で検出。埋壺 (298) の上半部は削平時に破壊され、埋土中に落ち込んでいた。ほぼ円形の掘り方を持ち、3基の中では一番小型である。掘り方の一部がわずかに建物の外に出ているが、SB-23に伴う可能性もある。

SK-25 SB-20の北側で検出。不正円形の掘り方を持ち、上半部は削平により欠失し不明である。埋壺本体 (288) の体部最大径はSK-24のものより一回り大きい。

SK-52 SB-23の東側にSK-24と並んで検出。



第9図 埋壺遺構実測図



第10圖 土坑遺物出土狀況図

上部に大型の石が2石落ち込み、甕の上半部が割れて埋土中に折り重なっていた。水田化の際、甕の内部を埋める目的で石を入れた可能性が高い。ほぼ完全な形に復元できた埋甕本体(299)は3基の内最大である。

3. 土坑(第10~13図)

調査中に検出した土坑は、粘土採掘坑の2基、竈跡群に隣接する5基を含めて合計90基にのぼるが、平面形状や遺物の出土状況についての共通性は特に見られず、用途を特定できるものも少ない。また、柱穴の検出状況が高密度なため、中には、複数の柱穴の切り合いによる大型の平面的プランを、便宜的に土坑として把握したものもある。また、ほとんどの土坑から土師器片、瓦質土器片を中心とする多量の土器片が出土したが、器形を復元できたものは多いとはいえない。

以下、代表的な土坑について概略する。

SK-34 調査区中央部西側、SB-14・15の北西で検出。SK-34の北側部分は、東西方向にほぼ並行する2つの水田の境にあたり、比高差が50cm程度の段落ちとなっている。従って北側の土坑の肩は失われており、加えて、複数の柱穴との切り合いがあることも重なって、平面形は不整形を呈する。床面から土師器片及び瓦質土器片が多量に出土。この中には土師器皿(254)・土師器杯(255・256)・瓦質土器拵鉢(257・258)の良好な一括資料が含まれる。

SK-45 SB-20の北西部分で検出。検出した当初は、上部に瓦質土器の大型甕の口縁部分が重なっていたため、SK-24・25・52と同様の埋甕遺構と見なしていたが、結果的には床面が浅く、埋甕遺構ではないことが判明した。ほぼ完形に復元できた瓦質土器大甕(272)を、複数の石で意図的に破砕したと見られ、甕の口縁から体部上半部が互い違いに重なった状態であった。他には、土坑内から土師器皿(268・269)、土坑に伴うと思われる小ピットから土師器杯(270)が出土。

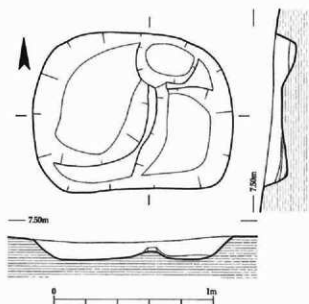
SK-47 調査区中央部、SD-3が終結する辺りの溝の肩で検出した。長軸を東西とする小型の隅丸長方形プランで、SD-3に切られて、東の肩は消失している。土坑内全面から土師器杯(283)、瓦質土器小型鉢(284)、足鍋(285)、大型鍋(286)などの多量の土器が折り重なって出土。

SK-51 平面プランの大きさから土坑としたが、断面形状と検出位置から、SB-19の西側の柱穴の一つである可能性もある。中層からほぼ完形の土師器杯(281)が出土。

SK-89 調査区の北側西端で検出した、長軸130cm、短軸85cmの草履状の平面プランを持つ土坑である。全体的にほぼ垂直の掘り方で、深さは40cm前後を測る。上層から中層にかけて、瓦質土器を中心とする多量の土器が出土した。これらの遺物の中で特異な出土状況を示したのは、瓦質土器の十能(265)、鍋(259)、拵鉢2点(261・262)である。いずれも底部を上にして順に伏せた状態で重ねられており、何らかの埋納儀礼が行われた遺構の可能性もある。他にも、瓦質土器足鍋(259)、拵鉢(263)、大甕の口縁部(264)などが出土した。

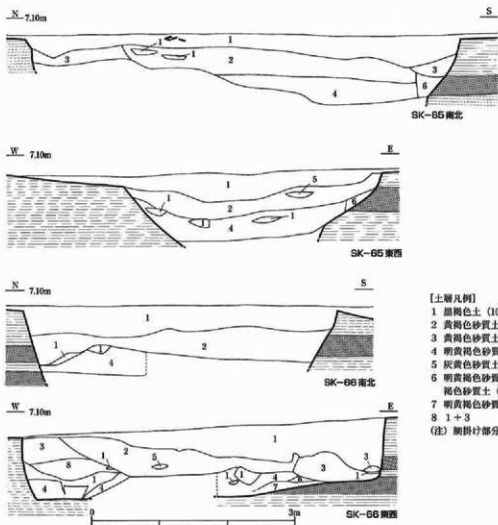
SK-29 調査区中央部、SK-47の北側で検出した、長軸125cm、短軸97cmの隅丸方形の平面プランを持つ浅い土坑である。中央部の狭いテラスで東西に隔てられる形状で、西側から陶器片と陶器の竈跡(371)が出土。その他には、瓦質土器甕(273)、陶器拵鉢(274・275)が出土している。

SK-65 調査区中央部やや北側に位置する、他の建物群とは棟方向が異なる4棟の建物(SB-26~29)の北東側で検出。遺物包含層がまだらに入り交じった平面プランは南北方向約7.7m、東西方向約



第11図 SK-29 実測図

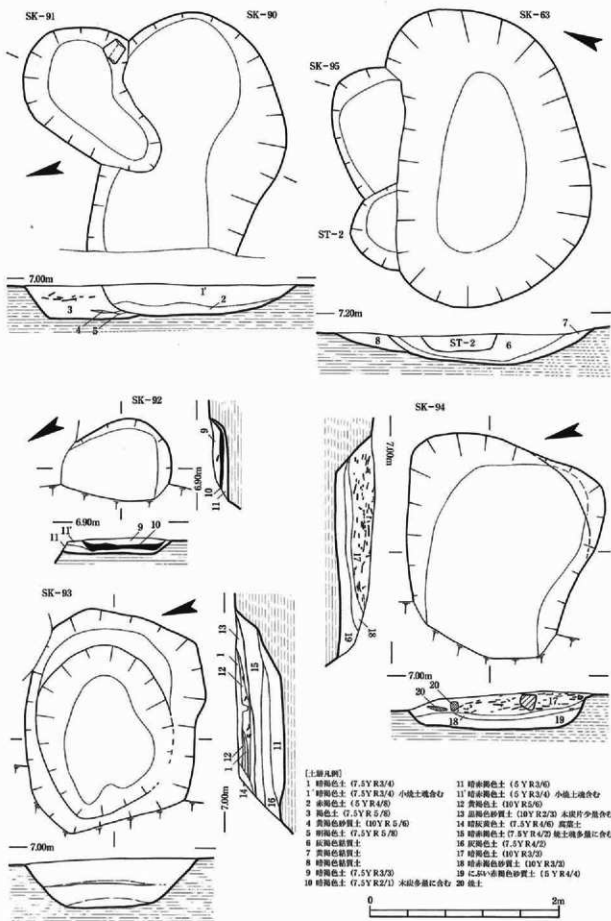
4.4mの不整の長楕円形を呈する。南北側はほぼ垂直に、東西側はやや斜めに、それぞれ人為的に掘り込まれていた。土層観察の結果、南側と東側に厚い粘土層があり、調査区内で確認した瓦質土器窯跡との関連から粘土採掘坑と思われる。遺物は、上部の遺物包含層中から土師器片、瓦質土器片とともに青磁碗(293・294)が出土している。なお、平面プランが大きく、トレンチの土層観察の結果、上部以外に遺物が認められなかったため、トレンチによる掘り込みに留めて、平面的な掘り込みは行わなかった。



第12図 SK-65・66土層断面図

【土層凡例】

- 1 黒褐色土 (10Y R3/1)
 - 2 黄褐色砂質土 (2.5Y R5/6)
 - 3 黄褐色砂質土 (10Y R5/6)
 - 4 明黄褐色砂質土 (10Y R6/8)
 - 5 灰黄色砂質土 (2.5Y 7/6)
 - 6 明黄褐色砂質土 (2.5Y 7/6)
 - 7 褐色砂質土 (10Y R4/5)
 - 8 1+3
- (注) 斜排け部分は粘土層



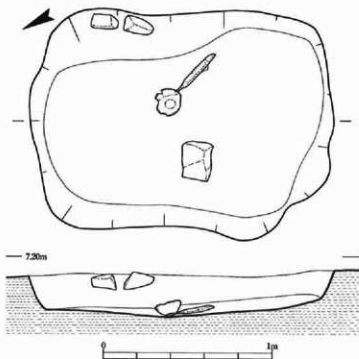
第13図 土坑実測図

SK-66 SK-65と南側が一部重複する粘土採掘坑である。平面形状は径約5mの不整形円で、SK-65に比べるとやや小型である。掘り方は東西方向、南北方向ともほぼ垂直で、土層観察の結果、東側、南側、北側に粘土層が確認できた。SK-65と同様に、平面的な掘り込みは行っていない。

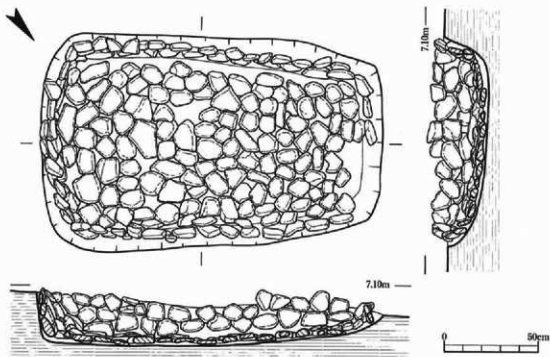
第13図は調査区西側の窟跡群に隣接し、またはこれらと重なって存在する土坑である。

SK-90・91は窟跡群に隣接する地点に存在し、SK-90がSK-91を切る。

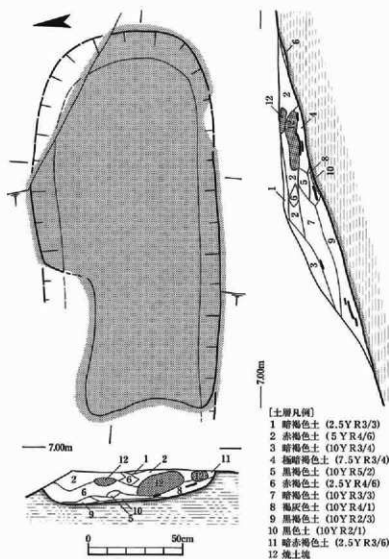
SK-90は埋土中に焼土の小塊を含んでおり、窟跡に関連する遺構の可能



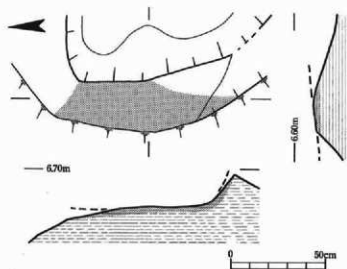
第14図 ST-1 実測図



第15図 ST-2 実測図



第16図 SF-1実測図



第17図 SF-2実測図

性を有する。SK-90は長軸は280cm以上、短軸は最大206cm、深さは最大35cmの土坑であり、主軸方位はN65°Wである。SK-91は長軸182cm以上、短軸は最大107cm、深さは最大36cmの土坑であり、主軸方位はN51°Eである。

SK-63・95は墓(ST-2)に切られるかたちで発見され、SK-63がSK-95を切る。

SK-63は長軸は320cm、短軸は114cm以上、深さは最大33cmの土坑であり、主軸方位はN7°Eである。SK-95は長軸130cm以上、短軸82cm以上、深さは最大36cmの土坑であり、主軸方位はN51°Eである。SK-63・95とSK-90・91はいずれも小型の土坑を大型の土坑が切るといふ状況で軌を一にする点に注意される。

SK-92は竈跡(SF-3)を切り、SK-93・94に切られ

る。木炭層および焼土塊を含む層が確認できるが、壁面・底面の被熱はみられない。長軸は115cm以上、短軸は90cm以上、深さは最大15cmの土坑であり、主軸方位はN57°Wである。

SK-93はSK-94に切れ、SK-92・SF-1・SF-3を切る。埋土中に焼土塊を含む層が確認できるが、壁面・底面の被熱はみられない。長軸は204cm以上、短軸は最大191cm、深さは最大53cmの土坑であり、主軸方位はN60°Wである。中段に平坦面をもち、焼土を多量に含む層を境として大きく上下2層に分かれる。

S K-94は埋土中に角礫・焼土塊および多量の土器片が確認できるが、壁面・底面の被熱はみられない。土坑南西部では一部袋状の断面形を呈する。長軸は231cm以上、短軸は最大198cm、深さは最大37cmの土坑であり、主軸方位はN60°Wである。埋土からは、上層を主体として多量の土器片が出土し、竈に関わる廃棄土坑と考えられる。

これらの土坑は、出土遺物から13~14世紀の遺構と考えられる。

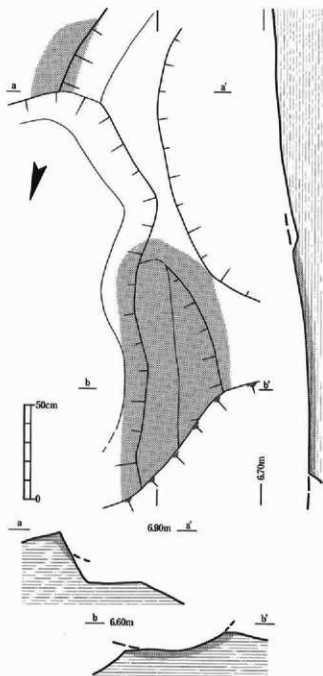
4. 墓 (第14・15図)

2基発見された墓は、調査区中央(中段)の東部および西部に単独で存在する。この2基は近い時期の所産と考えられるが、共通性はほとんどみられない。

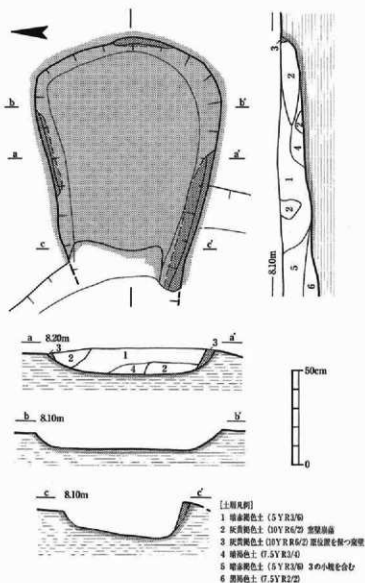
S T-1 (第14図) 調査区中央の建物群に隣接して、単独で発見された。長軸は182cm、短軸は最大128cm、深さは最大25cmの土坑墓であり、主軸方位はN25°Wである。底面直上からは、焼成後とみられる穿孔をもつ土師器椀および鉄刀各1点(第36図300・301)が出土した。人骨・棺材等は発見されなかったものの、土坑の規模と形状、遺物の出土状況から墓と判断される。なお、埋土の中・上層には礫が含まれており、墓標が存在した可能性がある。

土師器椀から、13世紀代の遺構と考えられる。

S T-2 (第15図) 調査区西端の竈跡群に隣接して、単独で発見された。長軸184cm、短軸は東側で115cm・西側で82cm、深さ最大27cmの土坑内面に、掌大の扁平な円礫を配するという特異な構造である。礫は底面では敷石状、壁面では貼石状を呈し、底面と壁面は基本的に不連続である。西側よりも東側が斜面のより高位にあり、土坑の幅が広いことから、頭位は南東(主軸はS45°W)と考えられる。礫は内面側のみが二次的加熱を受けており、被熱面に接するように、部分的に木炭が認められる。北東隅は後世の閉塞によって礫が失われたものとみられ、同様の礫が付近の耕作土中から出土した。壁面の貼石は現状では最大3段であるが、



第18図 S F-3実測図



第19図 SF-4実測図

SF-1 (第16図) 残存長205cm、最大幅99cm、深さは最大22cmの小型の登堂であり、天井部は遺存しない。

主軸方位はN83°W、床面の傾斜角度は約15°である。埋土中には崩落した壁体の一部と考えられる焼土塊が含まれる。底面および壁面は被熱により赤変する。出土する土器はすべて小破片であり、窠詰めを示す状況を示す遺物も認められない。

第37図313~333は窠体埋土から、334~343は窠体西側の腐葉土中からの出土遺物である。後者は出土状況から、前者の一部である可能性が高い。

SF-2 (第17図) 床面および壁面の一部がわずかに残存する。残存長28cm、残存幅101cm、深さは最大17cmである。底面および壁面は被熱により赤変する。確実にこの窠に伴うと判断できる遺物は確認されなかった。

SF-3 (第18図) 床面および壁面の一部が残存する。残存幅42cm、深さは最大10cmを残し、長さは250cm以上と推定される。底面および壁面は被熱により赤変する。確実にこの窠に伴うと判断できる遺物は確認されなかった。

埋土中に崩落した貼石が認められることから、本来はさらに数段存在したと考えられる。

出土遺物は土師器杯・皿および瓦質土器の羽釜片 (第36図302~312) である。土師器は完形に近いものを多く含むものの、これらは基本的に底面の礫から遊離した状態で出土した。これらの土器については副葬品として明確に認識できるものはないため、基本的に墓上への供献品とみられる。なお、土器は二次的加熱を受けていない。人骨・棺材・釘等は発見されなかったものの、土坑の規模と形状、遺物の出土状況から火葬墓と判断される。しかし、火葬施設である可能性も考慮する必要がある。

土師器等から、13~14世紀の遺構と考えられる。

5. 窠跡 (第16~20図)

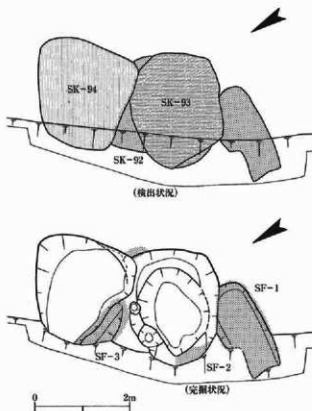
4基発見された。のうち3基は調査区西部の台地縁辺部に集中し、1基は調査区南部に単独で存在する。

SF-4 (第19図) 残存長131cm、最大幅98cm、深さは最大16cmの、三角形に近い平面形をもつ小型の平壺であり、床面はほぼ平坦である。調査区南部に単独で存在し、浅い土坑(SK-46)を切るかたちで掘り込まれる。焚口部の形状については明確に捉えることはできなかった。主軸方位はほぼ東西(N90°W)であり、底面および壁面は被熱により赤変し、一部に壁体を残す。埋土中には焼土塊を多量に含むものの、出土遺物は少量であった(第38図)。焼土は還元状態に近く、硬く焼け締まる。スサを多く含むことから、崩落した壁体の一部と考えられる。

出土土器から推定される窯跡の年代は、SF-1~3は13~14世紀、SF-4は15~16世紀である。

調査区西部の台地縁辺部に集中する3基(SF-1~3)については、接近して築かれて

おり、時期差が想定される。しかし、SF-1はSK-93に、SF-2はSK-92・93に、SF-3はSK-92・94の掘削によって一部ないしほぼ全体を攪乱されており(第20図)、窯相互の先後関係を直接的に把握することはできない。調査当初、これら窯跡群と重複するかたちで検出された土坑(SK-92~94)についても、埋土中に焼土を含むことから窯跡と考えたが、最終的には窯廃絶後に掘り込まれた土坑と判断した。しかし、これらの土坑も埋土から出土した土器から、窯跡群と大きく隔たらない時期の所産と考えられる。



第20図 窯跡群平面図

IV 遺物

一括性の高い共伴資料を中心として、以下に主要な出土遺物を紹介する。

第21~23図は柱穴出土の遺物である。

SP-760 (第21図1~3) 土師器皿3点の共伴資料である。

3点はほぼ同じ法量(口径6.3~6.4cm、器高0.8~1.0cm)をもち、胎土、器壁の厚さ等も近似性が高い。いずれも完形ないしそれに近い個体であり、祭祀坑の可能性がある。

SP-494 (第21図4・5) 土師器皿2点の共伴資料である。

2点はほぼ同じ法量(口径7.3・7.1cm、器高1.4・1.3cm)をもち、胎土・器壁の厚さ等も近似性が高い。いずれも完形に近い個体であり、祭祀坑の可能性がある。

SP-50 (第21図6~9) 土師器皿4点の共伴資料である。

法量では、口径の規格性があまり認められず（口径6.2～7.4cm、器高0.8～1.0cm）、胎土・器壁の厚さ等についても近似性は比較的低い。

SP-15（第21図10～13） 土師器皿3点の共伴資料である。

法量では、口径の規格性があまり認められず（口径6.9～7.4cm、器高1.0～1.1cm）、胎土・器壁の厚さ等についても近似性は比較的低い。11以外は完形に近い個体である。

SP-12（第21図14～16） 土師器皿4点の共伴資料である。

法量には規格性があまり認められず（口径5.9～7.2cm、器高0.8cm）、胎土・器壁の厚さ等も近似性は低い。14については完形である。

SP-29（第21図17・18） 土師器杯2点の共伴資料である。

2点は形態的には近似するものの、法量では若干の差異をもつ（口径10.9・11.5cm、器高4.0・4.3cm）。胎土・器壁の厚さ等については近似性が高い。出土状況は第6図に示した。

SP-46（第21図19～21） 土師器杯と瓦質土器小型鉢の共伴資料である。

小型鉢2点は、法量（口径4.6・4.8cm、器高2.2・2.7cm）は若干異なるものの、胎土・器厚等も近似性が高い。いずれも完形ないしそれに近い個体であり、祭祀坑の可能性がある。土師器杯が底部を糸切りするのに対し、瓦質土器小型鉢は底部外面には板目が顕著である。

SP-7（第21図22～24） 土師器皿・杯の共伴資料である。

いずれも底部を糸切りする。土器は柱穴の下位から重なって出土した（第4図）。

SP-1223（第21図25～27） 土師器皿、瓦質土器小型鉢・火鉢片の共伴資料である。

26は体部の内面に縦方向の、外面に横方向のハケメが残り、体部外面下位には粘土継目がみられる。27は火鉢と考えられ、肩部外面に印花文が施される。体部内面については炭素の吸着があまりみられない。

SP-28（第21図28～29） 瓦質土器小型鉢と砥石の共伴資料である。

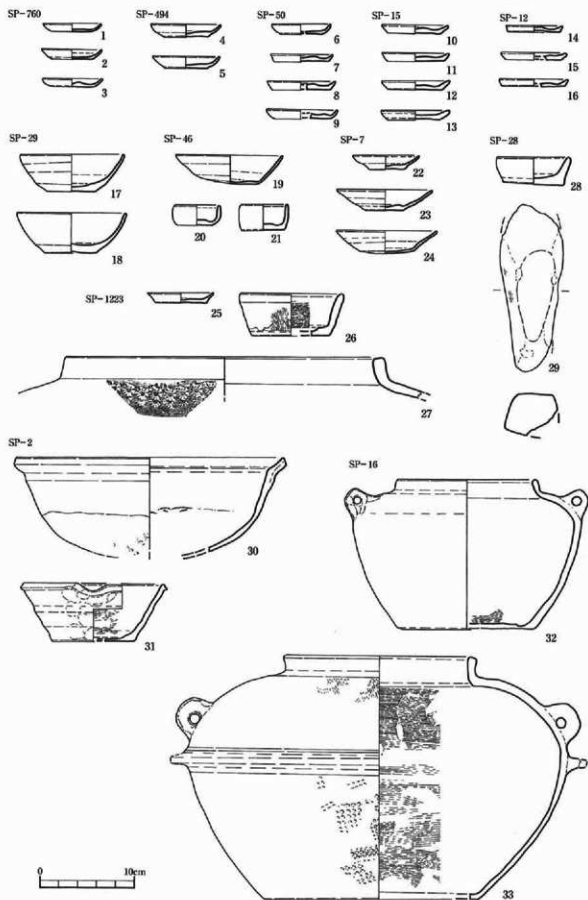
28は底部外面に板目がみられる。29は淡緑色の塩基性片岩の礫を転用したものと考えられる。出土状況は第6図に示した。

SP-2（第21図30・31） 瓦質土器の鍋と鉢の共伴資料である。

30は内・外面をナデによって調整するが、底部外面には格子叩きの痕跡がわずかに認められる。内面の体部と底部の境界部分には、連続する弧状の圧痕がみられる。これについては、底部の叩き成形に伴う当て具痕跡の可能性が指摘できる。脚の有無については不明である。31は小型の鉢であり、片口をもつ。卸目をもたず、内面には横方向を基本とするハケ調整がみられ、外面はナデによって調整される。底部外面には板目がみられる。出土状況は第4図に示した。

SP-16（第21図32・33） 瓦質土器の二耳壺1点と湯釜1点の共伴資料である。

32は体部内面下位にハケによる調整痕が認められるほかは、器表の摩滅が顕著であるため、器面調整は不明である。33は外面をナデによって器面調整するが、体部上半にはハケ、下半には格子叩きの痕跡をわずかにとどめる。内面はハケによって器面調整し、底部外面には板目がみられる。底部と鍋の先端部を欠くものの、体部はほぼ完形に復元された。類例の少ない大型の湯釜であり、成形時に体部下半に叩きを行うこと、平底であることなども特異である。2点の土器は破砕され、柱穴埋土中から



第21图 柱穴出土遺物実測図 (1)

折り重なって出土した（第5図参照）。

第22図は柱穴から単独で出土した、主な土器・土製品である。

34はSP-1067、35はSP-21、36はSP-736、37はSP-904、38はSP-769、39はSP-295、40はSP-1594、41はSP-1569、42はSP-9、43はSP-115、44はSP-289、45はSP-942、46はSP-25、47はSP-1448、48はSP-1137、49はSP-1496、50はSP-1080、51はSP-1359、52はSP-1444、53はSP-44、54はSP-13、55はSP-14、56はSP-1197、57はSP-1516、58はSP-1230、59はSP-768、60はSP-58、61はSP-56、62はSP-27、63はSP-1、64はSP-470、65はSP-5、66はSP-48、67はSP-17、68はSP-1476、69はSP-20、70はSP-30、71はSP-845、72はSP-1426、73はSP-41、74はSP-3、75はSP-55、76はSP-1034、77はSP-1442、78はSP-1151、79はSP-1028から出土した。

34～51は土師器皿である。いずれも底部は回転糸切りである。35・42については出土状況をおおの第5・4図に示した。

52～59は土師器杯である。いずれも底部は回転糸切りである。53・55については出土状況をおおの第7・5図に示した。

60・61は土師器碗である。いずれも底部は回転糸切りの後、高台を貼り付ける。60は高台の中心と体部の中心が一致しない。61については出土状況を第7図に示した。

62は瓦質土器羽釜である。体部外面はハケメをナデによって消し、底部外面は格子叩きの痕跡をハケによって消す。

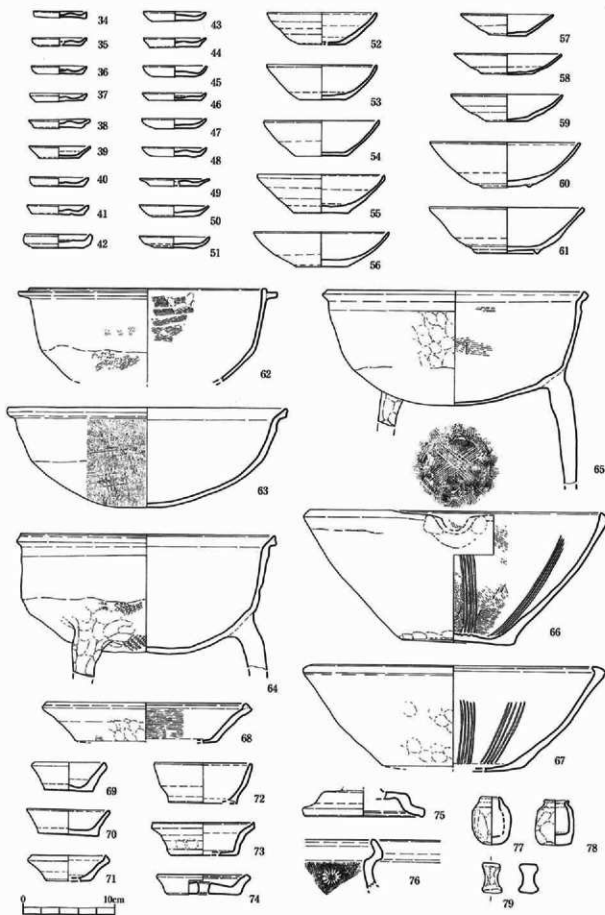
63～65は瓦質土器鍋である。64・65は足鍋であるが、63は脚をもたないと考えられる。63は全体に焼き歪んでおり、実測図の口径および体部の傾きについては本来的なものではない。内面にわずかにハケ痕跡が認められる。底部外面には格子叩きの痕跡がみられる。64は体部の内外面をナデによって調整するが、内面にはわずかにハケメが残る。65は全体に焼き歪みが顕著であり、実測図の口径および体部の傾きについては本来的なものではない。体部外面は指頭圧痕が顕著である。底部外面はナデによって器面調整される。63については出土状況を第4図に示した。

66・67は瓦質土器播鉢である。66は口径に比して器高が高く、底径も比較的小さい。片口は一部のみの遺存である。体部外面はナデによってハケ痕跡をほぼ完全に消す。体部内面には5本を単位とする卸目が全体で7条施され、底部内面にも「×」字状の卸目が施される。底部外面には板目が残る。外面では、体部以下に炭素の吸着がみられない。67は体部外面の指頭圧痕が顕著であり、体部内面はナデによって器面調整される。片口の有無については不明である。体部内面には5本を単位とする卸目が施され、底部内面にも卸目の一部が確認できる。底部外面には板目が残る。66については出土状況を第6図に示した。

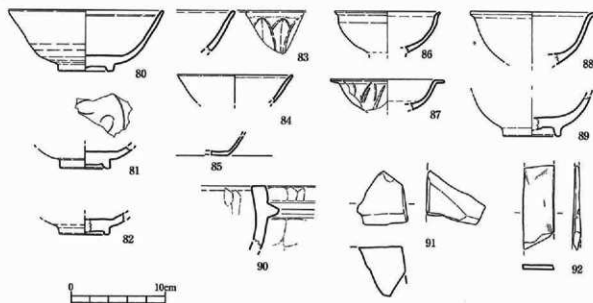
68は瓦質土器焙烙であり、把手を欠く。底部外面には板目が残る。

69～73は瓦質土器小型鉢である。いずれも、体部の内外をナデによって器面調整し、外面については一部に指頭圧痕を残す。底部外面には板目を残す。他の遺跡では出土例の少ない器形であり、用途についても不明である。69については出土状況を第5図に示した。

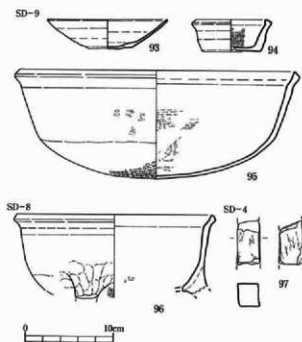
74は完形で出土した土師器有孔皿である。基本的にナデによって調整し、底部外面には板目を残す。



第 22 图 柱穴出土遺物実測図 (2)



第23図 柱穴出土遺物実測図 (3)



第24図 溝出土遺物実測図

底部の中央には焼成前の穿孔があり、灯火器等としての用途が推定される。出土状況については第4図に示した。

75は瓦質土器蓋である。天井部中央を円形に欠いており、本来は柄みを持つものと考えられる。体部の内外はナデによって調整し、底部外面には、柄み貼付けに伴うとみられる粘土の付着がみられる。出土状況については第7図に示した。

76は器形不明の大型土師器の口縁部であり、火鉢の可能性もある。内外をナデによって調整し、内面の口縁部直下には印花文が施される。

77・78は瓦質のミニチュア土器である。

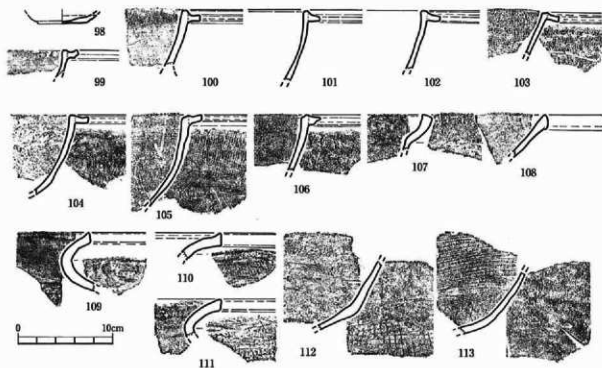
手捏ねで製作され、内外には指頭圧痕が顕著である。77については出土状況を第8図に示した。

79は瓦質の土製品である。鼓形を呈し、両端には平坦面をもつ。用途は不明である。

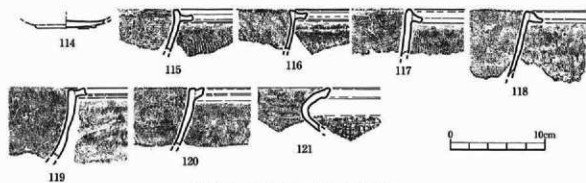
第23図は柱穴から単独で出土した磁器および石製品である。

80はSP-57、81はSP-34、82はSP-1248、83はSP-1047、84はSP-1042、85はSP-840、86はSP-1127、87はSP-672、88はSP-1073、89はSP-1022、90はSP-1329、91はSP-331、92はSP-1400から出土した。

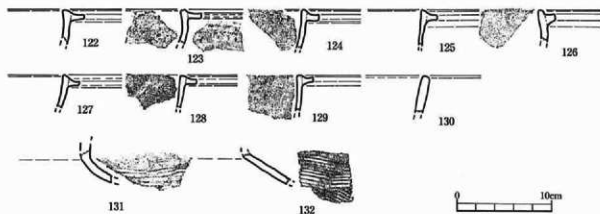
80～83は灰オリブ色の釉を施す青磁碗であり、いずれも高台内無釉である。80は内面の口縁部直



第25图 SK-90出土遺物実測図



第26图 SK-91出土遺物実測図



第27图 SK-92出土遺物実測図

下の沈線と見込みの圏線以外は無文である。出土状況は第7図に示した。81は見込みに花文と圏線をもつ。

83は外面に蓮弁文を施す。84・85は白磁皿である。

84は口縁端部を無釉とし、85は底部外面も施釉する。86・87は青色に近い釉を施す青磁碗である。86は無文、87は外面に片切彫による蓮弁文をもつ。

88・89は灰オリブ色の釉を厚く施す無文の青磁碗である。89は高台内にも施釉し、蛇ノ目状に釉ハギを行う。

90は滑石製の石鍋であり、工具の痕跡が顕著に残る。

91・92は、凝灰岩を石材とする磁石である。

出土遺物から、柱穴は13世紀から16世紀にかけての所産とみられる。

第24図は溝出土の遺物である。

SD-9 (第24図93~95) 93は土師器杯であり、底部外面に板目が残る。94は瓦質土器の小型鉢であり、底部外面に板目が残る。95は瓦質土器の鍋であり、脚の有無は不明である。底部外面には縦格子状の叩き痕跡が残る。

SD-8 (第24図96) 瓦質土器の足鍋である。器表は摩滅するものの、底部外面には格子叩きの痕跡が残る。

SD-4 (第24図97) 砂岩を石材とする磁石であり、4面を使用する。

SD-8・9については、出土遺物から、16世紀に属するものとみられる。

第25~35図は土坑から単独で出土した遺物である。

SK-90 (第25図) 98は土師器杯の底部であり、底部を糸切りする。

99~106は瓦質土器の羽釜であり、100は脚を貼り付けた痕跡が確認できる。基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって調整し、底部外面については叩き痕跡をハケによって消す(104・105)。101・102については摩滅により調整は不明である。

107は搬入品と考えられる瓦質土器の鍋であり、内面には横方向のハケが残る。外面の器面調整は不明である。

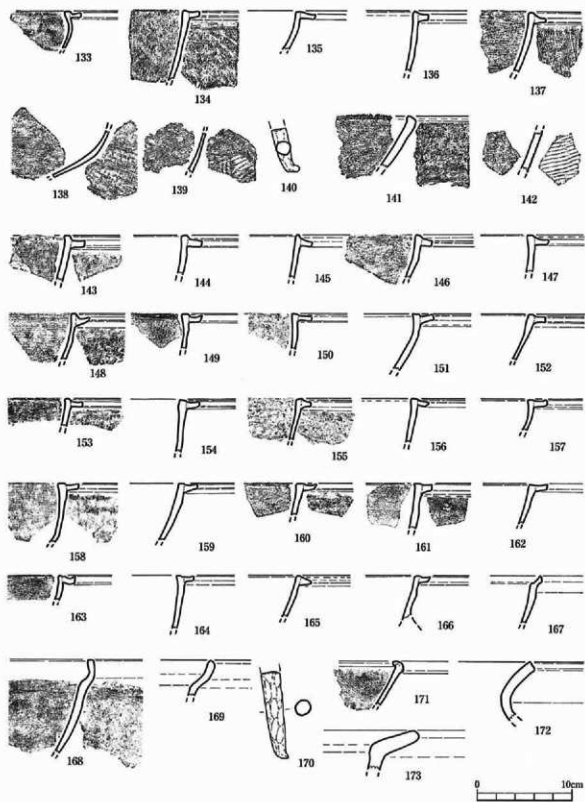
108は玉縁状の口縁をもつ瓦質土器の鉢であり、外面の体部以下では炭素の吸着がみられない。内面には横方向のハケが残る、外面は斜め方向のハケがわずかに残る。なお、内面の御目も確認できない。

109~111は瓦質土器の甕である。基本的に、内面および口縁部外面はハケによる器面調整のちナデ、体部外面は格子叩きの痕跡を残す。

112・113は瓦質土器の鍋または甕の一部である。いずれも軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。いずれも内面は横方向のハケが残る。外面については、112は縦方向のハケおよび格子叩きの痕跡が、113では粗いナデおよびハケがみられる。

SK-91 (第26図) 114は土師器碗の底部であり、底部を糸切りしたのち高台を貼り付ける。ミガキ痕跡は確認できない。黒色土器である可能性を有する。

115~120は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって調整する。



第 28 圖 SK-93 出土遺物実測図

121は瓦質土器の甕である。内面および口縁部外面はハケによる調整のちナデ、体部外面は格子叩きの痕跡を残す。

SK-92(第27図) 122~129は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。125・127・129は軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。

130は瓦質土器の鉢であり、軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。内面にはわずかに横方向のハケメが残る。

131・132は瓦質土器の甕である。摩滅のため器面調整は不明であるが、体部外面は平行叩きの痕跡を残す。

SK-93(第28図) 土坑埋土は焼土をはさんで、上層・下層遺物に大きく二分できたため(第13図)、ここでは別個に紹介する。

133~142はSK-93の埋土下層から出土した遺物である。

133~137は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。134~136は軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。138・139は羽釜または鍋の体部から底部にかけての破片である。基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。底部外面については、138は格子叩き、139は平行叩きの痕跡をハケによって消す。140は羽釜または鍋の脚部端である。瓦質であり、先端部の屈曲が強い。

141は瓦質土器の鉢であり、軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。内面には横方向のハケメ残り、外面は縦方向のハケメをナデによって消す。

142は瓦質土器甕の体部片である。内面には横方向のハケメ、外面には平行叩きの痕跡を残す。

143~173はSK-93の埋土上層から出土した遺物である。

143~166は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。

143~145・147・150・153・154・157・159・162は軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。166は外面には脚部を貼付けた痕跡が認められる。内面をナデによって器面調整するが、外面については調整不明である。

167~169は鍋である。167は土師質で、摩滅により器面調整は不明である。168・169は瓦質であり、搬入品と考えられる。基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって調整する。

170は羽釜または鍋の脚部端である。

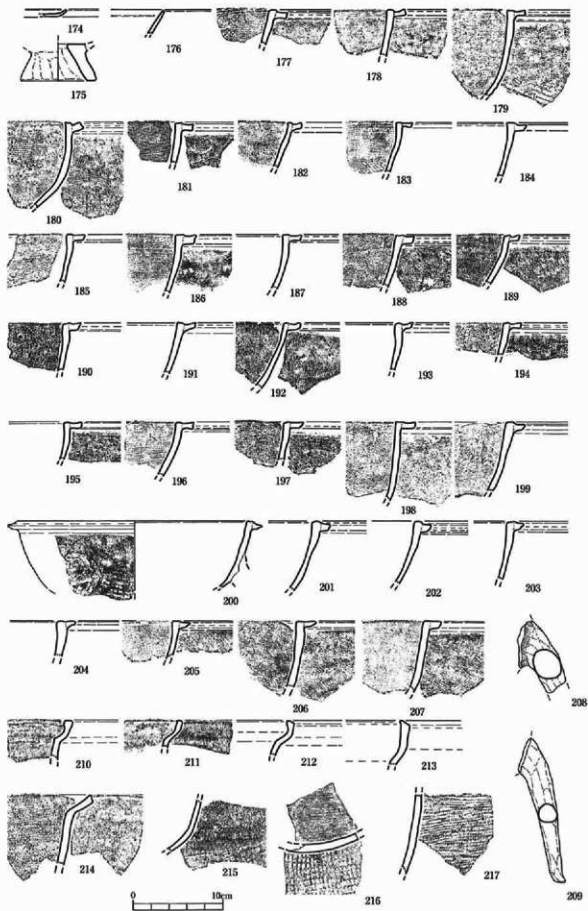
171は玉縁状の口縁端部をもつ瓦質土器の鉢である。内面には斜め方向のハケメがみられる。内面の卸目については確認できない。

172は瓦質土器の甕であり、摩滅により器面調整は不明である。

173は土師器の甕と考えられ、体部内面には横方向のハケメがみられる。寛形土器の一部である可能性を指摘できる。

SK-94(第29~31図) 出土遺物はその出土状況から、上位・下位に大きく二群に分離できたため(第13図)、ここでは別個に紹介する。

第29・30図はSK-94の埋土上層から出土した遺物である。



第29圖 SK-94出土遺物実測圖 (1)

174・175は土師器の皿および有孔台付皿である。175は焼成前にヘラ状の工具によって、底面側から抉るように穿孔する。器面調整・底部の切離し等については摩擦のため不明である。

176は青磁碗片である。灰オリーブ色の釉を施し、内面の口縁部直下に沈線をもつ。第23図80と同一個体であり、接合する。

177～207は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。178・180・185・201・203～205は軟質であり、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。200については、体部外面に脚を貼付けた痕跡が認められ、底部外面には格子叩きの痕跡が残る。

208・209は羽釜または鍋の脚部である。208は羽釜または鍋の体部との接合部分をハケによって器面調整する。

210～214は搬入品とみられる瓦質土器の鍋である。基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。

215・216は羽釜または鍋の体部ないし底部の破片である。215は底部外面の格子叩き痕跡をハケによって消す。216は内面をハケによって器面調整し、外面の格子叩き痕跡を部分的にハケによって消す。甕の体部である可能性を有する。

217は瓦質土器甕の体部片であり、外面には平行叩きの痕跡を残す。

218～223は瓦質土器の鉢であり、卸目をもつものは確認できない。基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整し、外面はハケののちに粗くナデる。221・222には片口が遺存する。223の底部外面には板目がみられる。

224・225は瓦質土器甕の口縁部であり、基本的にナデによって器面調整される。

第31図はSK-94の埋土下層から出土した遺物である。

226～228は貼付けの高台をもつ土師器碗である。いずれも内・外面の器面調整はナデによるとみられるが、ミガキの可能性もある。226については底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。また、227は全体的に明褐色ないし暗灰色を呈しており、黒色土器である可能性を有する。

229～242は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。229・232・235・237・238・241は軟質で、炭素吸着が不十分であるため土師質に近い。

243・244は搬入品とみられる瓦質土器の鍋である。基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって調整する。

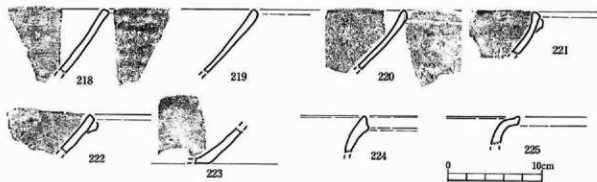
245・246は羽釜または鍋の、体部および底部の破片である。いずれも底部外面の格子叩き痕跡をハケによって部分的に消す。

248・249は羽釜または鍋の脚部である。土坑の底面から出土した遺物であり、指頭圧痕をナデによって調整するなど、同種の脚としては比較的丁寧なつくりである。

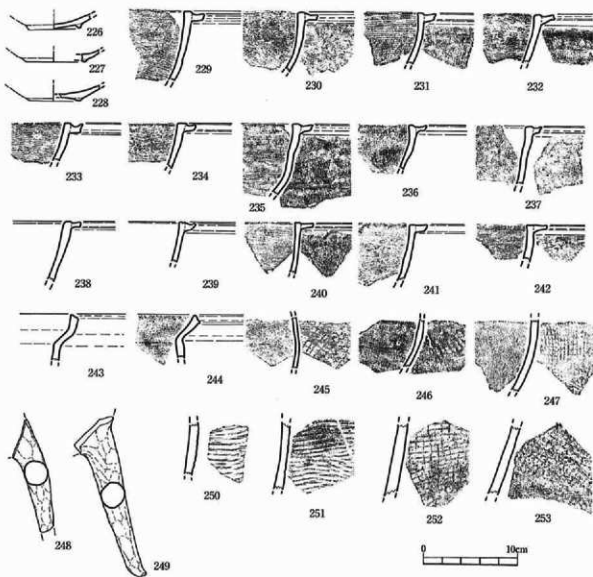
250～253は瓦質土器甕の体部片である。外面には250・251では平行叩き、252・253では格子叩きの痕跡を残す。内面はナデ調整を基本とするが、250・251では同心円の当具痕跡が確認でき、252はハケメが残る。

SK-34 (第32図254～258) 土師器皿・杯と瓦質土器摺鉢の共伴資料である。

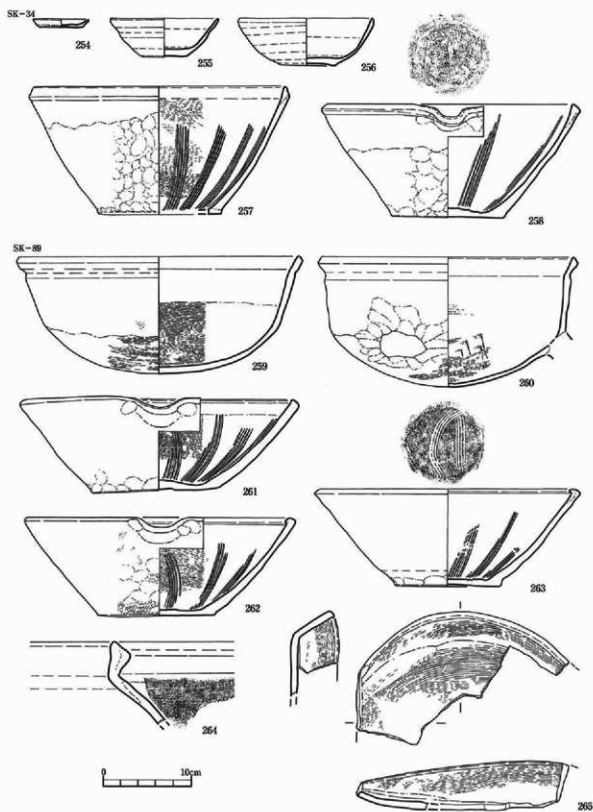
254は土師器の皿、255・256は土師器の杯である。いずれも、にぶい橙色の胎土をもつや軟質の土



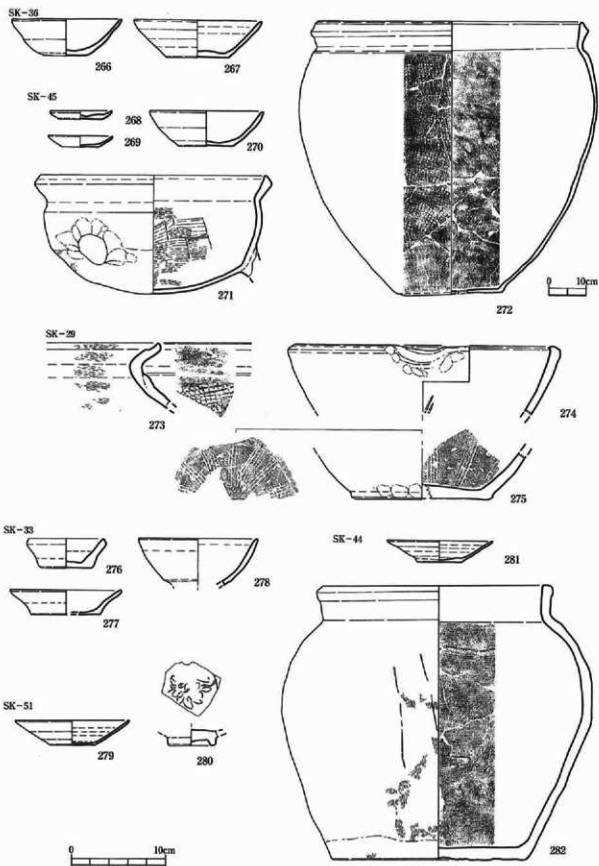
第 30 圖 SK-94 出土遺物実測図 (2)



第 31 圖 SK-94 出土遺物実測図 (3)



第 32 圖 土坑出土遺物実測図 (1)



第 33 图 土坑出土遺物実測図 (2)

器であり、底部を糸切りする。

257・258は瓦質土器挿鉢である。いずれも口径に比して器高が高い点が特徴的であり、いずれも使用による磨耗が確認できないため、未使用品と判断できる。257は内面をハケ調整したのちナデ、外面は基本的に指押えのまま器面調整せず、口縁部内外面のみ丁寧にナデる。卸目は5本を単位とし、全体で16条前後と推定される。片口および見込みの卸目の有無については不明である。258は幅が狭く、やや深い片口をもつ。卸目は5本を単位とし、全体で8条を施す。卸目は見込みから体部にかけて、一連の放射状とする。内面はハケ調整したのち丁寧にナデ、外面は基本的に指押え痕跡をナデによって消す。底部外面には板目がみられず、かわって布目圧痕が認められる。出土状況については、第10図に示した。

SK-89 (第32図259~265) 瓦質土器の鍋・挿鉢・甕・十能の共伴資料である。出土状況については、第10図に示した。

259・260は瓦質土器鍋である。259はほぼ完形であり、脚をもたないことが確認できる。外面は体部を縦方向にハケ調整したのち粗いナデを行い、底部は叩き痕跡をハケによって完全に消す。内面は横方向を基本とするハケ調整を体部のみナデによって消す。260は259と同様の調整を行うものの、脚の貼付け痕跡が認められる。

261~263はほぼ完形の瓦質土器挿鉢である。261・262は片口をもち、器面調整は基本的に内面はハケのちナデ、外面は基本的に指押えのまま口縁部内外面のみ丁寧にナデる。底部外面には板目を残す。卸目は5本を単位とし、全体で16条を施す。見込みの卸目は無い。263は体部の卸目は14ないし15条とみられ、見込みに「D」字状の卸目をもつ。体部は内外ともナデによって器面調整し、片口の有無については不明である。261~263はいずれも使用による磨耗が確認できないため、未使用品と判断できる。

264は瓦質土器大甕である。口縁部および体部内面はナデによって調整され、体部外面は格子叩きの痕跡を残す。

265は瓦質土器の十能であり、本来は把手を有するものとみられる。内面はハケ、体部外面はナデによって調整され、底部外面には板目が残る。焙烙形を基本に製作されたものと考えられ、先端部分はヘラ状の工具で断ち落とす。

SK-36 (第33図266・267) 土師器杯2点の共伴資料である。いずれもやや軟質で、底部を回転糸切りする。

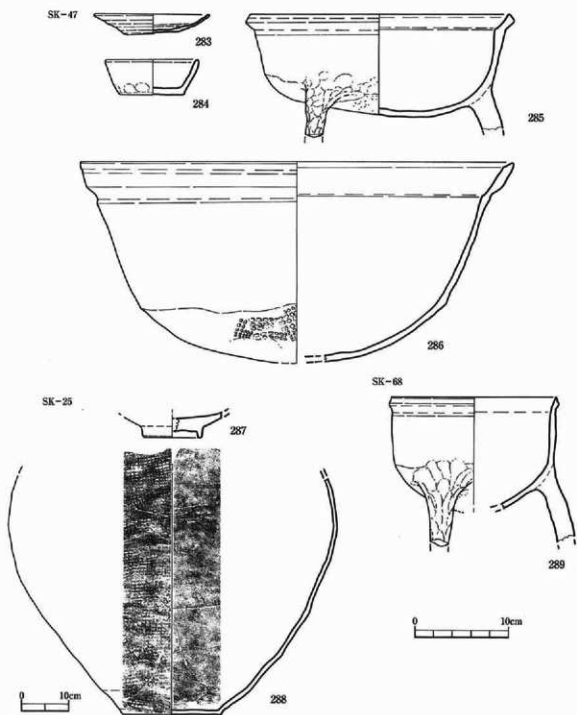
SK-45 (第33図268~272) 土師器皿・杯、瓦質土器足鍋・大甕の共伴資料である。出土状況については、第10図に示した。

268・269は皿、270は杯であり、これらの土師器はいずれもやや軟質で、底部を回転糸切りする。

271は足鍋であり、内面をハケによって器面調整し、底部外面は叩き痕跡をハケによって消す。

272は破碎されて土坑中に投棄された状況であったが、ほぼ完形に復元された。体部は外面では格子叩きの痕跡が顕著であり、内面は当具の痕跡をハケによって消す。底部中央には焼成後とみられる穿孔が認められる。

SK-29 (第33図273~275) 瓦質土器甕、陶器挿鉢の共伴資料である。



第34図 土坑出土遺物実測図 (3)

273は瓦質土器である。口縁部および体部内面はヘケのちナデ調整、体部外面は格子叩きの痕跡を残す。

274・275はにぶい橙色を呈するやや軟質で無釉の陶器片であり、同一個体である可能性を有する。基本的に内外面ともナデにより調整される。片口をもち、底部外面はナデによって器面調整される。卸目は5本を単位とし、見込みから体部にかけて一連の放射状の卸目を施す。使用による磨耗が顕著である。この土坑からは、表面がガラス状に溶解する窯壁片が多く出土しており、この中には陶器片

が溶着したものを含む。

SK-33 (第33図276~278) 瓦質土器小型鉢と陶器碗の共伴資料である。

276・277は瓦質土器小型鉢である。いずれも体部はナデによって器面調整し、底部外面には板目を残す。

278は黒褐色の釉を施す陶器碗であり、瀬戸焼とみられる。

SK-51 (第33図279・280) 土師器杯と青磁碗の共伴資料である。

279はほぼ完形の土師器杯である。底部は糸切りであり、板目を残す。

280は青磁碗である。高台内は無軸であり、見込みには花文をもつ。

SK-44 (第33図281・282) 土師器杯と瓦質土器甕の共伴資料である。出土状況については、第10図に示した。

281は土師器杯であり、見込みに静止ナデを施す。底部は糸切りであり、板目を残す。

282はほぼ完形の瓦質土器甕である。内面を横方向、外面を縦方向にハケによって調整し、外面はハケののちに粗くナデる。体部外面の一部にはヘラによる縦方向の沈線が施される。底部外面には板目が顕著である。

SK-47 (第34図283~286) 土師器杯と瓦質土器小型鉢・足鍋・鍋の共伴資料である。出土状況については、第10図に示した。

283は土師器杯であり、見込みに静止ナデを施す。底部は糸切りである。

284はほぼ完形の瓦質土器小型鉢である。体部の内・外面はナデによって器面調整し、底部外面には板目を残す。

285は瓦質土器足鍋である。口縁部および内面はナデ、体部外面は粗いナデ、底部外面は格子叩きの痕跡をナデによって消す。全体的に焼き歪みがみられる。

286は瓦質土器の大型鍋であり、口径は45cmを超える。全体の3分の1程度を残しており、脚をもたないことが確認できる。口縁部および内面はナデ、体部外面は粗いナデ、底部外面は格子叩きの痕跡をナデによって消す。

SK-25 (第34図287・288) 青磁碗と瓦質土器大甕の共伴資料である。

287は無文の青磁碗であり、高台は無軸である。

288は埋甕として土坑中に埋設された瓦質土器大甕である。口縁部および体部上半を欠く。内面はハケののちナデを行い、当具痕跡を留める。体部外面は格子叩きの痕跡を残す。底部外面は一部に板目を残す。出土状況については、第10図に示した。

第34図289および第35図は基本的に、土坑から単独で出土した土器・磁器および石製品である。

289はSK-68、290はSK-32、291はSK-48、292はSK-23、293・294はSK-65、295はSK-11、296はSK-40、297はSK-58、298はSK-24、299はSK-52から出土した。

289は瓦質土器足鍋である。口縁部および内面はナデ、体部外面は粗いナデ、底部外面は格子叩きの痕跡をナデによってほぼ完全に消す。全体に焼き歪みがみられる。

290・291は土師器皿、292~294は高台無軸の青磁碗である。293は外面に蓮弁文、294は見込みに花文が施される。

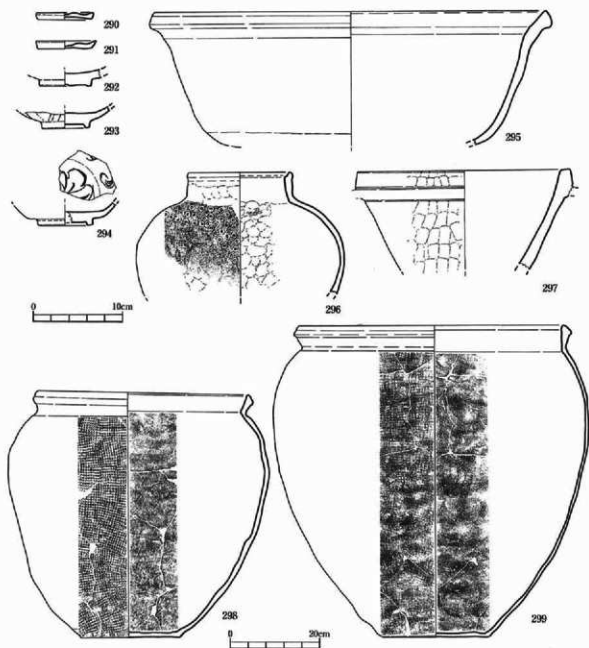
295は瓦質土器の大型鍋であり、脚をもたない。口縁部および内面はナデ、体部外面は粗いナデ、底部外面は格子叩きの痕跡をナデによって消す。

296は壺形の瓦質土器であり、鈔をもたないものの、湯釜とみられる。内外とも指頭圧痕をナデによって調整する。体部の外面上位には竹管状の工具による施文をもつ。なお、体部の外面下位には煤が付着する。

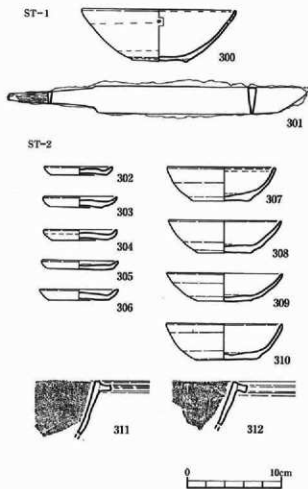
297は滑石製の石鍋であり、内外面に工具痕が残る。

298・299はいずれも埋甕として土坑中に埋設された瓦質土器大甕である。いずれも、体部外面には格子叩きの痕跡を残し、底部外面には板目がみられる。体部内面は、298では当具痕跡をハケによって消し、299では当具痕跡をナデによって調整する。出土状況については、第9図に示した。

土坑については、出土遺物から、13世紀から16世紀にかけての時期の所産とみられる。



第35図 土坑出土遺物実測図 (4)



第36図 ST-1・2出土遺物実測図

311・312は瓦質土器羽釜である。302～310が供献品と考えられるのに対し、これらは墓坑埋土の混入品とみられる。302・303は埋土上層、304・305は墓坑西側の埋土中層、306・308・310は墓坑北東側の埋土中層、309は墓坑ほぼ中央の床面近くから出土した。

第37・38図は窟跡から出土した遺物である。

SF-1 (第37図) 窟跡埋土中から出土した遺物と窟跡直近の腐葉土層から出土した遺物を紹介する。

313～333は窟跡埋土中の遺物である。

313～321は瓦質土器の羽釜であり、基本的に内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。

322～325は瓦質土器鉢である。基本的に内面を横方向のハケで、外面をナデによって調整する。326は瓦質土器甕の口縁部であり、内外面ともにナデによって調整する。

327～333は瓦質土器甕の体部片であり、内面にはハケメ、外面には平行叩きの痕跡を残す。

334～343は窟跡直近の腐葉土層から出土した遺物である。

334・335は瓦質土器の羽釜であり、内面を横方向、外面を縦方向にハケによって器面調整する。

336は瓦質土器の鍋であり、調整は不明である。

第36図は墓から出土した遺物である。

ST-1 (第36図300・301) 土師器碗と鉄刀各1点が相伴した。

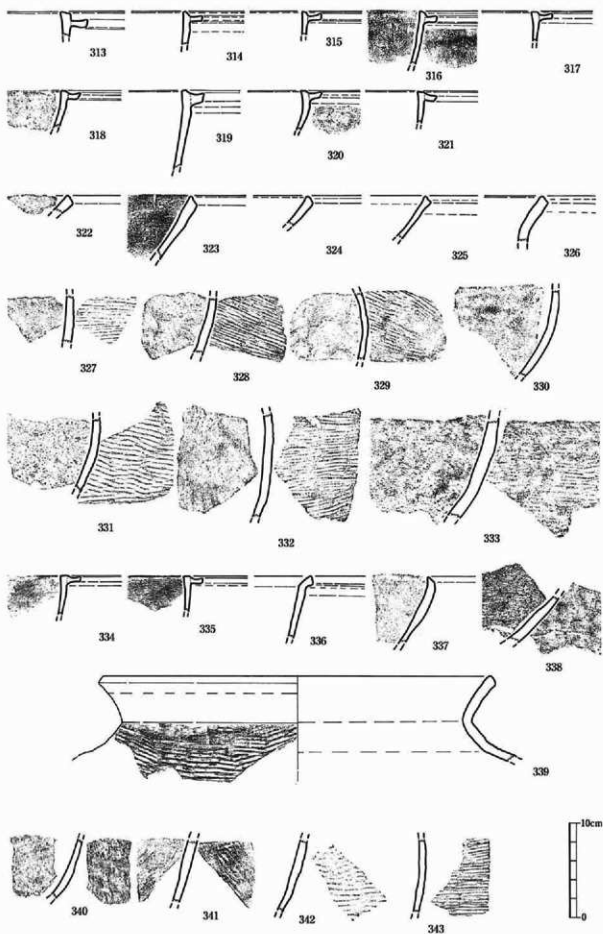
300は貼付け高台をもつ土師器碗である。切離しは不明であるが、底部外面には板目がみられる。口縁部直下の1か所には焼成後とみられる穿孔をもつ。

301は残存長31.9cm、刃部長22.2cm、刃部幅3.0cm、刃部最大厚0.8cmの鉄刀である。茎の一部には木質が付着する。出土状況については、第14図に示した。

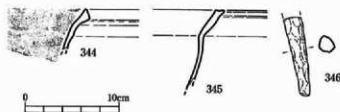
ST-2 (第36図302～312) 土師器皿・杯と瓦質土器羽釜片が出土した。

302～306は土師器皿であり、法量には若干の差異あるものの(口径7.1～8.1cm、器高1.0～1.2cm)、胎土・器壁の厚さ等は近似性が高い。いずれも完形に近い個体である。

307～310は土師器杯であり、法量には若干の差異あるものの(口径11.2～12.2cm、器高3.0～3.8cm)、胎土・器壁の厚さ等は近似性が高い。309以外は完形に近い個体である。



第 37 图 SF-1 出土文物实测图



第38図 SF-4 出土遺物実測図

337・338は瓦質土器の鉢であり、卸目は確認できない。基本的に内面は横方向、外面は縦方向のハケによって調整する。

339～343は瓦質土器甕の体部片であり、340は内外ともハケによって調整し、これ以外は内面にはハケメ、外面には平行叩きの痕跡を残す。

SF-4（第38図） 344・345は瓦質土器の鍋であり、内面は横方向のハケによって調整し、外面は粗くナデる。

346は瓦質土器鍋の脚端部であり、先端の屈曲はみられない。

第39図は柱穴・土坑・溝から出土した土錘である。

形態的には円筒形（347～359）、紡錘形（360～364）、細紡錘形（365～370）の3種に分類できる。

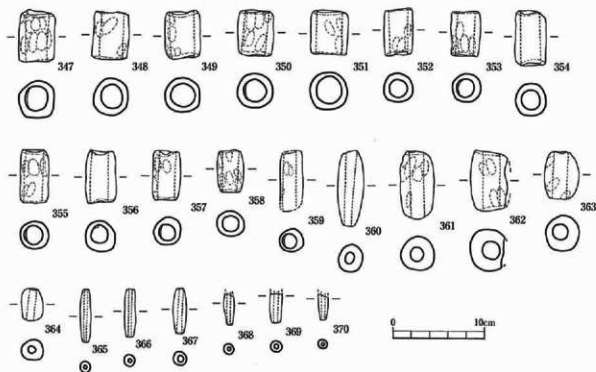
また、焼成技術の面からみれば瓦質（347～351、353～359、361～363、365～370）、土師質（352・360・364）の2者がある。

円筒形のタイプでは外径2.4～4.0cm、内径1.5～2.8cm、長さ4.5～6.6cmで、紡錘形のタイプでは外径2.4～4.5cm、内径0.8～2.0cm、長さ3.5～8.2cm、細紡錘形のタイプでは外径1.1～1.5cm、内径0.4～0.6cm、長さは最大5.8cmである。

347はSP-40、348～351はSP-31、352・353はSP-34、354はSP-1305、355はSP-770、356はSP-361、357はSP-691、358はSP-772、359はSP-364、360はSK-46、361はSP-780、362はSP-694、363はSP-418、364はSP-23、365はSK-46、366はSP-947、367はSP-993、368はSP-1444、369はSP-1371、370はSD-8から出土した。

以上に図示した遺物以外にも、土坑（SK-29、図版25 371）および柱穴（SP-76）からは窯体の溶着して陶器化した土器片が出土しており、未発見ながらも陶器窯跡が調査区付近に存在する可能性が高い。また、SP-59から紹聖元宝1・元祐通宝3・銭名不明2、SP-25から熙寧元宝1、SP-26から開元通宝1・元祐通宝1・淳口元宝1が出土した。

なお、遺構に伴わない状態で姫島産黒曜石製の石鏃1、磨製石斧片1が採集されており、形態等から縄文時代の遺物と考えられる。



第39図 土鉢実測図

V ま と め

この度の岩淵遺跡の発掘調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡31棟、溝13条、埋甕遺構3基、土坑90基、墓2基、瓦質土器窯跡4基、柱穴約3000個である。これらの遺構からは、土師器（皿・杯・椀）、瓦質土器（羽釜・鍋・鉢・播鉢・甕・壺・蓋）を中心として、その他にも土師質の羽釜・鍋・鉢・播鉢・湯釜、搬入品を含む国産陶器（甕・播鉢）、瓦質の土鉢、中国製の輸入磁器・銅銭、鉄製品（鉄刀）、石製品（砥石・石鏝）など、コンテナ数にして約100箱分という、膨大な量にのぼる遺物が出土した。出土遺物の時期から、遺構はすべて古いもので12～13世紀代、新しいもので15世紀後半～16世紀前半代のものであり、とりえず岩淵遺跡は中世の集落遺跡とみなすことができる。

しかしながら、この集落遺跡は、稲作や畑作農業を中心とする一般的な中世集落ではない、というのも、岩淵地区の位置する横曽根川東岸にはかなり広範囲な平地が広がり、現在は水田地帯となっているが、もともとこの一帯の河岸段丘は比高差が5mを超え、水利の便が悪い所であった。また、横曽根川上流の切畑一帯の低地は、地名からも伺えるように近世段階のものと推定される開墾地であり、岩淵地区の西から南にかけて広がる現在の水田地帯は、近世以降の干拓によって産まれたものである。つまり、近世以前の大道地域一帯は、農業を生産基盤の中心に置くには、地形的に恵まれていなかったとみるべきであろう。その証拠に、今回の調査では、姫島産の縄文時代の石鏝を表土中から採集した以外、古代以前の遺構および遺物は全く発見できていない。調査区のすぐ南西には古墳時代後期の岩淵古墳があるにも関わらず、同時期のものは須恵器の小片さえ出土していないのである。なお、弥生から古墳時代にかけての集落の痕跡がなかったのは、切畑南遺跡の調査でも同様であった。

それでは、当地の人々は、長州藩による大規模な水田化が行われる近世以前には、どのようにに生業

を営んでいたのだろう。その一端が伺えるのが、切畑南遺跡で発見された冶金に関わる遺構であり、今回の岩瀬・原の両遺跡で発見された窯跡と多量の土鍾である。つまり、農業には不向きな地形であっても、冶金、窯業、漁業など、与えられたその他の自然条件を活かして生活していたことが、発見された遺構・遺物から推測できるのである。岩瀬遺跡調査区の南東約30mには、中世の貝塚（岩瀬貝塚）が露頭していることも、それを端的に示すものといえよう。

さて、今回、岩瀬遺跡で4基、原遺跡で4基、合計8基の瓦質土器の窯跡が発見された。これは、山口県内で初めての発見であり、西日本で見ても、知見では、岡山県倉敷市の亀山窯、香川県国分寺市の楠井遺跡検出の土器焼成窯などが知られるだけという貴重な資料となった。岩瀬遺跡についていえば、出土遺物から見たときも、瓦質土器片の割合が圧倒的に高く、中でも、未使用の播鉢が数多く発見されたのは特筆に値する。実は、調査区南側には「カガチ釜」という小字名があり、「釜」は「窯」の転化と思われるが、「カガチ」とは播鉢（こね鉢を含む可能性もある）のことである。つまり、岩瀬地区には、以前「カガチ」を焼く窯があり、それが小字名として残ったのである。

岩瀬地区の東側の佐野峠を越えた佐野地区には、古来から「佐野焼」という瓦質土器の日用雑器の窯が多数点在し、一方、当地の西隣の山口市陶地区は、古代を中心に須恵器を焼いていた場所として知られている。また、萩焼の陶土は大道産ということからも象徴されるように、大道地域は良質の粘土生産地である。ちなみに、今回の岩瀬・原の両遺跡でも、調査区内からそれぞれ粘土採掘が行われた土坑が検出されている。近隣に伝えられた古代からの焼き物技術と良質の粘土の存在という、焼き物生産地としての条件に恵まれた場所が岩瀬地区周辺であったといつてよいであろう。

では、岩瀬地区における瓦質土器を中心とする窯業は、いつ頃から行われていたのだろうか。このことについて、掘立柱建物の時期的変遷とも関連させて考察したい。

今回の調査で確認した掘立柱建物を構成する柱穴の出土遺物で、最も古いものはSB-18のSP-15出土と、SB-28のSP-1359出土の12～13世紀の土器器皿であるが、12～13世紀代のもはこれだけである。一方、時期的に後続するのが、現在の岩瀬集落の中心部に近い調査区東側で検出した建物群（SB-1・2・5・6・7）で、建物の時期は13～14世紀代、しかもこの場所は、前述の「カガチ釜」の北西側後背地にあたるのが注目される。一方、今回の出土遺物の時期は、すべて12～13から16世紀前半代に属するものの、量的には13～15世紀代のもが中心である。以上のことを勘案すると、岩瀬地区の瓦質土器生産は、遅くとも鎌倉時代中期には開始され、室町時代がその最盛期であったと見るべきであろう。また、調査区内で確認した建物群の大きなまとまりとしては、調査区の中央部に15～16世紀頃の一群（SB-18・19・21・22・23・25）が集中することから、集落自体は、時代を遡って、東から北西側に広がっていった可能性がある。これは、今回検出した窯跡群が調査区西側斜面から検出されたことから、もともと調査区南東側（小字名の「カガチ釜」一帯）で始まった瓦質土器の生産が、窯の構築に適する斜面を求めて次第に西から、原地区へと続く北側へ移っていったことを示唆する可能性をもつ。

なお、建物群について付け加えると、調査区東側の一群は、東西から南北方向にL字状に曲がる溝と並行しており、特に、SB-6・7の南には柵状の柱穴列も検出した。建物群の北側は調査区外のため、全体の形態について確たることはいえないが、L字状に検出した溝は、本来建物群を運る可能

性が高く、溝と、楯列、建物という中世集落の存在形態の一端が窺える資料として興味深い。一方で、調査区中央部の建物群の周囲では溝を検出できなかったが、ここは、遺構面が南東側より50cm程度低かったことから、水田化に伴う後世の削平が大きかったためであろう。

次に、少なくとも13世紀にはその起源を持つと思われる岩瀬地区の瓦質土器生産がどのように展開されたのか、その器種について考えてみたい。

調査区で確認された窟跡はSF-1～4の4基で、その内、SF2・3に確実に伴うものは出土していない。そこで、手掛かりとなるのは、SF-1と4、および関連する土坑の出土遺物となるが、まず、SF-1からは瓦質土器の羽釜、鍋、鉢、甕が出土し、足鍋と思われるものは1点も出土していないことに注目したい。遺物から推定される窟跡の年代は、13～14世紀である。また、SF-1より新しい時期のものであるSK-94からは、SF-1と同様の器種を中心とする多量の土器が廃棄された状態で出土したが、この中に一部含まれていた瓦質土器脚部も、釜の脚部である可能性が極めて高い。遺物から推定できるSK-94の時期は、SF-1とほぼ同じである。一方、4基の窟の内最も時期が新しいと思われるSF-4からは、15～16世紀代の瓦質土器の鍋と足鍋の脚部が出土している。いわゆる防長型の足鍋は、14世紀前半に出現期とするとされ、資料的には十分とはいえないが、SF-1・4の出土遺物は以上のことと矛盾せず、当地でも、当初は、羽釜、鍋、鉢、甕を主な生産器種とし、その後、羽釜と入れ替わるようにして足鍋の生産が始まったものと思われる。ただ、今回の調査では、足鍋の生産開始時期について、明確に特定できる資料は得られていない。

防長型の足鍋は、室町時代を通じて防長地域を中心に広く流通し、最近では、東は石見、南は豊前、豊後、西は、筑前、肥後から五島列島まで、各地の中世遺跡で出土例が報告されている。これらの流通範囲は、山口にその本拠を置き、室町時代の有力な守護大名であった大内氏の勢力圏と深く結びついている。すなわち、足鍋の流通には、何らかの形で大内氏の庇護があったと見るべきで、このことを裏付けるのが、岩瀬地区での瓦質土器の生産の終焉時期である。

山口市の大内館跡においても、足鍋を中心とする多量の瓦質土器が発見されているが、大内氏の滅亡により、岩瀬地域の瓦質土器は、その大量消費地を失うこととなった。毛利氏が萩に本拠地を置いたことは、それにいっそう拍車をかけただけでなく、朝鮮半島から技術導入された萩焼をはじめとする近世の陶磁器の幅広い流通、さらには近世になっての鉄製の鍋と釜の安定供給は、急速にその販路を奪ったことであろう。結局、近世以降の足鍋は、神社の神札儀式などに使用されるもの等を除き、全く生産されなくなり、岩瀬地区の瓦質土器生産地もその役割を失ったものであろう。

以上、今回の調査で明らかになったことがらについてまとめてみたが、岩瀬地区での瓦質土器の生産については、明らかになっていないことも多い。瓦質土器の焼成が最初に始まった場所、周辺一帯における瓦質土器窟跡の分布状態、そして、岩瀬地区で防長型の足鍋が生産され始めた時期など、今後の資料によって、よりその実体が明らかになることを期待したい。

- 参考文献 山口県教育委員会 『五組遺跡・西小路遺跡』 1983
防府市 『防府市史 資料1』 1994
山口県埋蔵文化財センター 『切畑南遺跡』 1996
山口県埋蔵文化財センター 『切畑南遺跡 II』 2000



岩淵遺跡遠景（西より）



岩淵遺跡遠景（南より）



岩淵遺跡全景



竈跡群と中世墓（西より）



南西側建物群



トレンチ設定状況（東より）



SP-1 遺物出土狀況



SP-2 遺物出土狀況



SP-3 遺物出土狀況



SP-7 遺物出土狀況



SP-9 遺物出土狀況



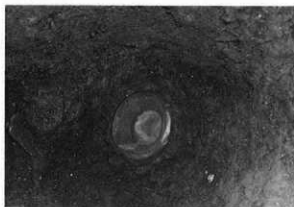
SP-10 遺物出土狀況



SP-14 遺物出土狀況



SP-16 遺物出土狀況



SP-20 遺物出土状況



SP-21 遺物出土状況



SP-25 遺物出土状況



SP-26 遺物出土状況



SP-28 遺物出土状況



SP-29 遺物出土状況



SP-30 遺物出土状況



SP-31 遺物出土状況



SP-44 遺物出土状況



SP-47 遺物出土状況



SP-48 遺物出土状況



SP-49 遺物出土状況



SP-55 遺物出土状況



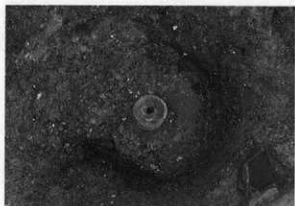
SP-56 遺物出土状況



SP-57 遺物出土状況



SP-58 遺物出土状況



SP-59 遺物出土状況



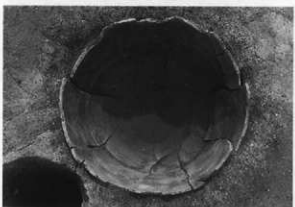
SP-1442 遺物出土状況



SD-5 遺物出土状況



SD-9 遺物出土状況



SK-24 遺物出土状況



SK-25 遺物出土状況



SK-52 遺物出土状況



SK-34 遺物出土状況



SK-44 遺物出土状況



SK-45 遺物出土状況



SK-47 遺物出土状況



SK-51 遺物出土状況



SK-89 遺物出土状況



SK-89 遺物出土状況



SK-29 窯壁出土状況



SK-93 完掘

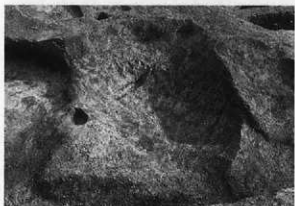
図版 9



SK-94 遺物出土状況



SK-94 遺物出土状況



SF-2.3.SK-93 完掘



SK-90.91 完掘



ST-1 遺物出土状況



ST-1 遺物出土状況



ST-2 遺物出土状況



ST-2 遺物出土状況



ST-2 完掘（西より）



SF-1 土層断面（西より）



S F-4 焼土出土状況 (西より)



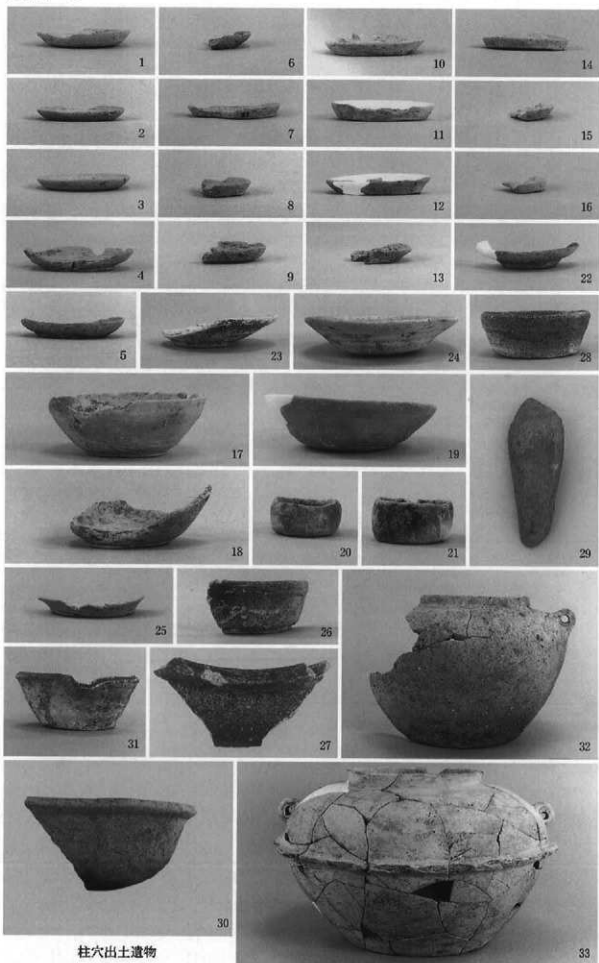
S F-4 完掘 (西より)



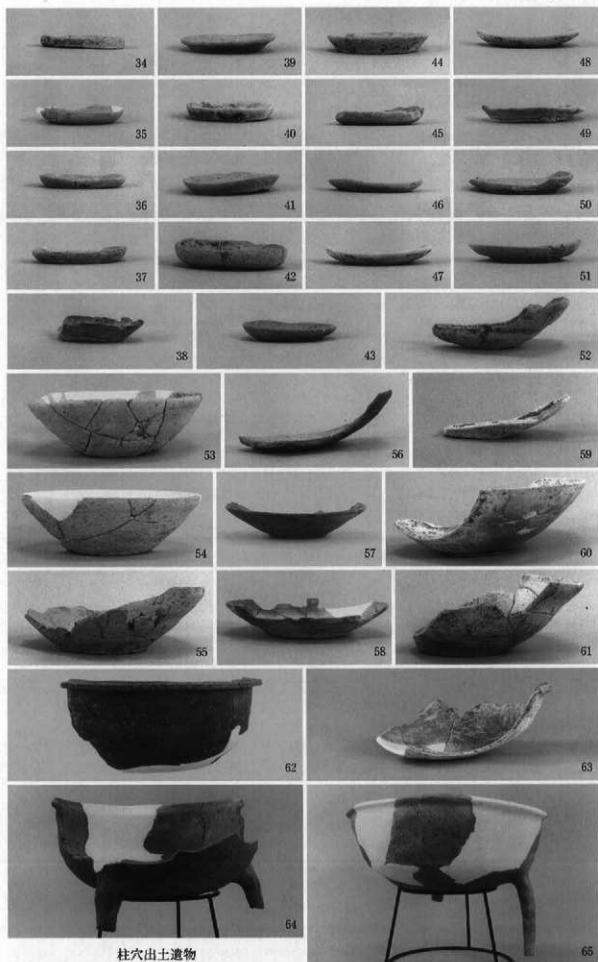
窯跡群 (南西より)



窯跡群 (北西より)



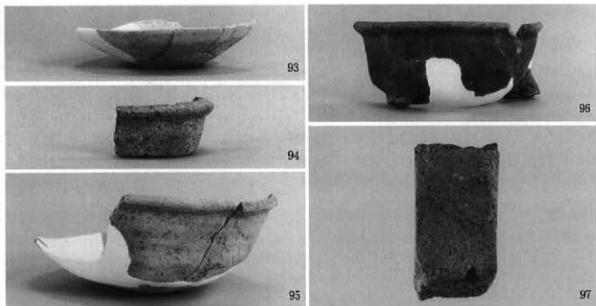
柱穴出土遺物



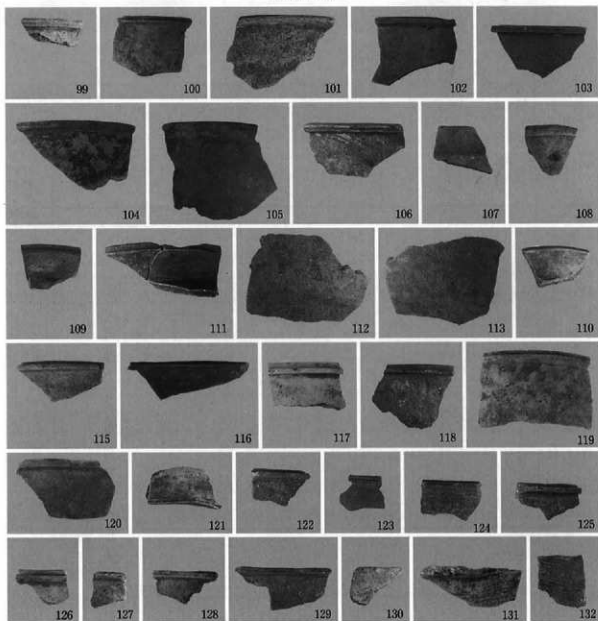
柱穴出土遺物



柱穴出土遺物

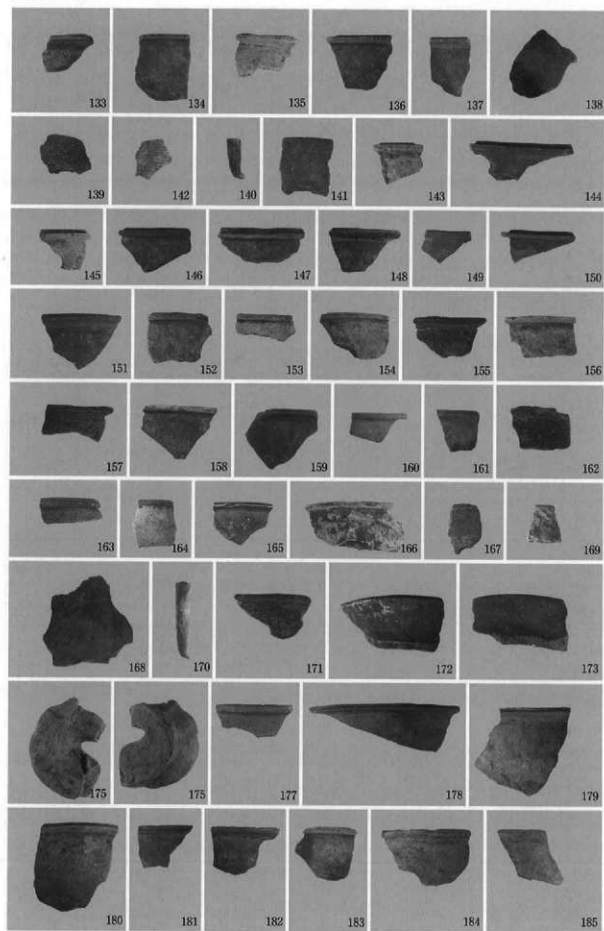


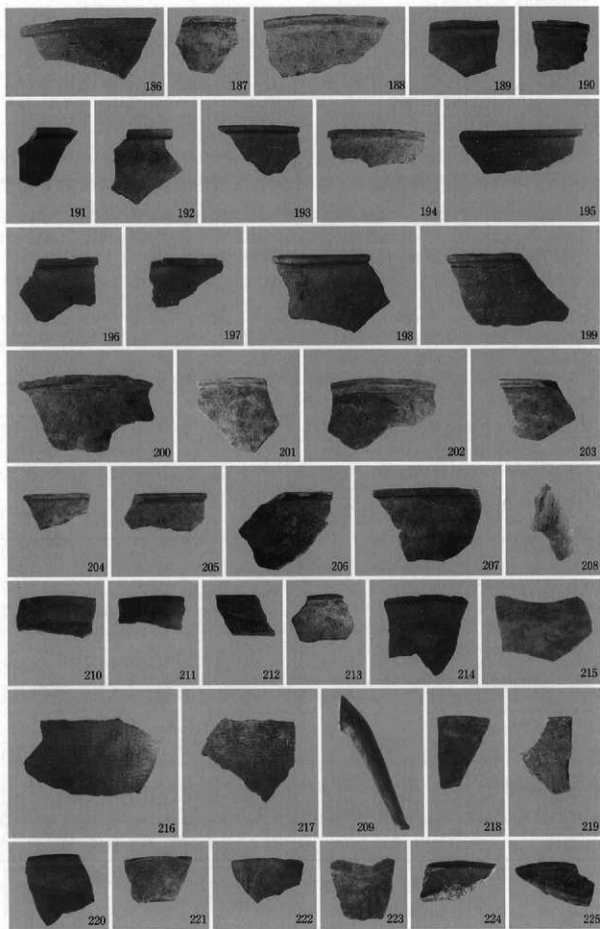
溝出土遺物



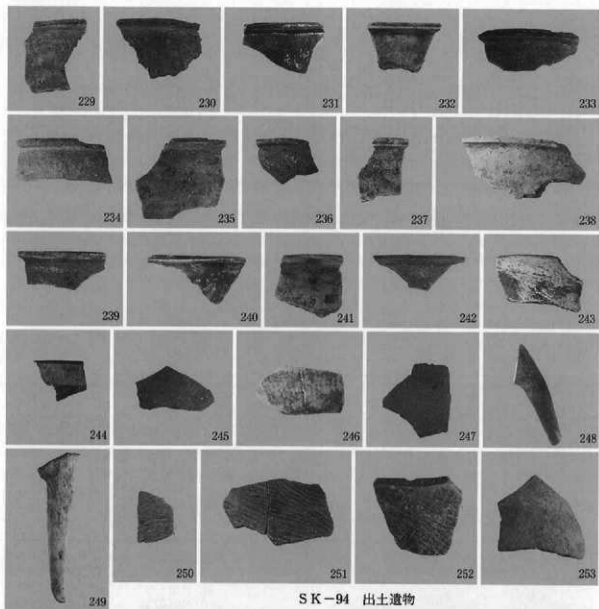
SK-92 出土遺物

图版 17

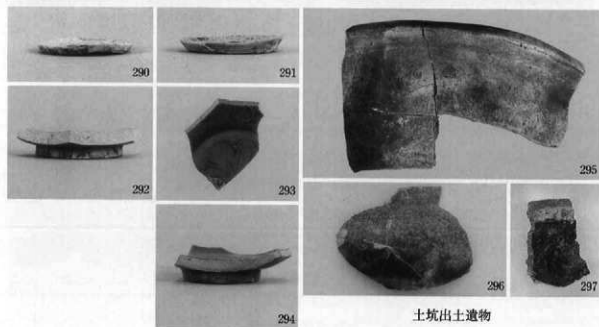




S K-94 出土遺物



SK-94 出土遺物



土坑出土遺物



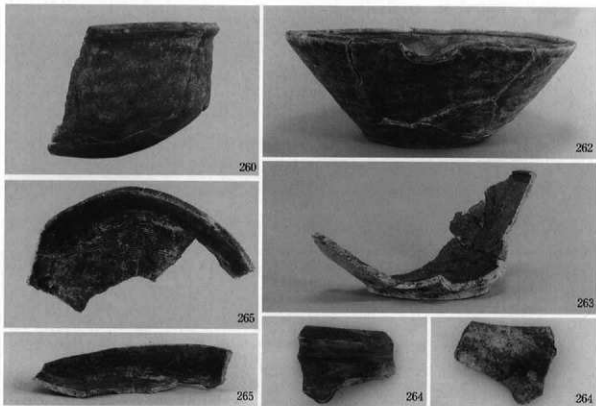
埋甕遺構出土遺物



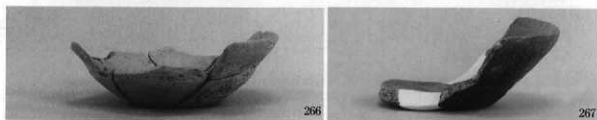
SK-34 出土遺物



SK-89 出土遺物



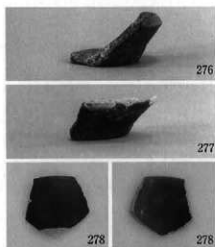
SK-89 出土遺物



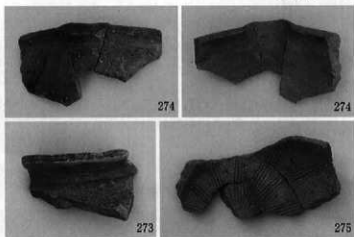
SK-36 出土遺物



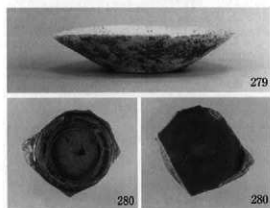
SK-45 出土遺物



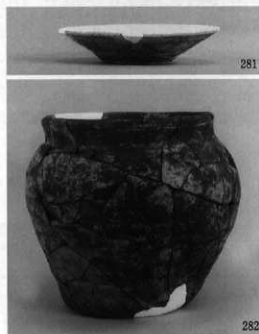
S K-33 出土遺物



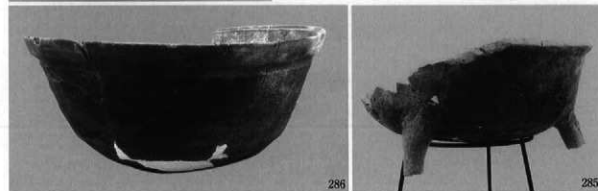
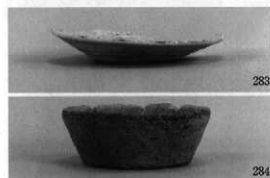
S K-29 出土遺物



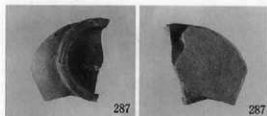
S K-51 出土遺物



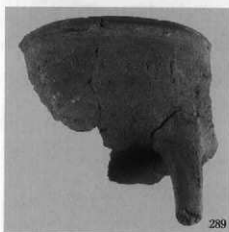
S K-44 出土遺物



S K-47 出土遺物



SK-25 出土遺物



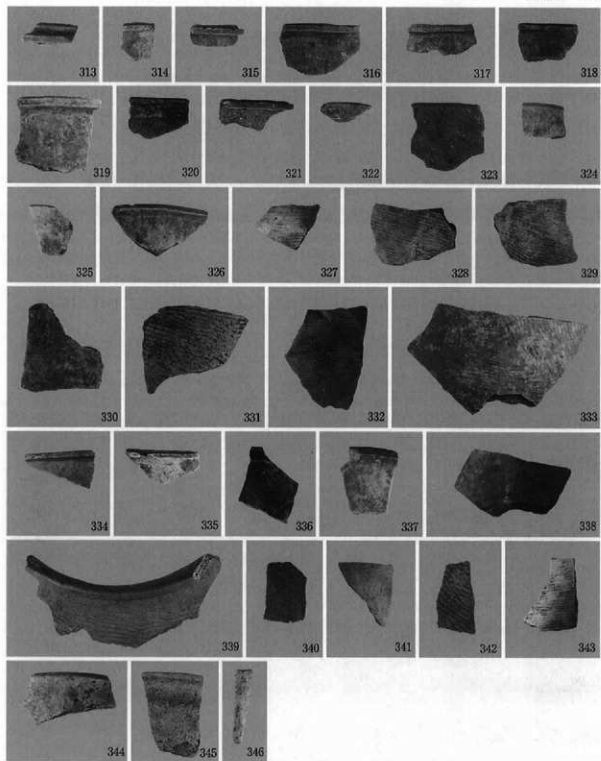
SK-68 出土遺物



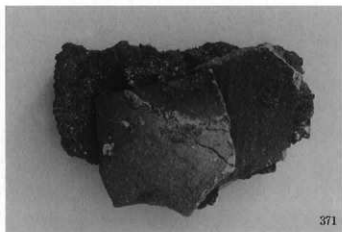
ST-1 出土遺物



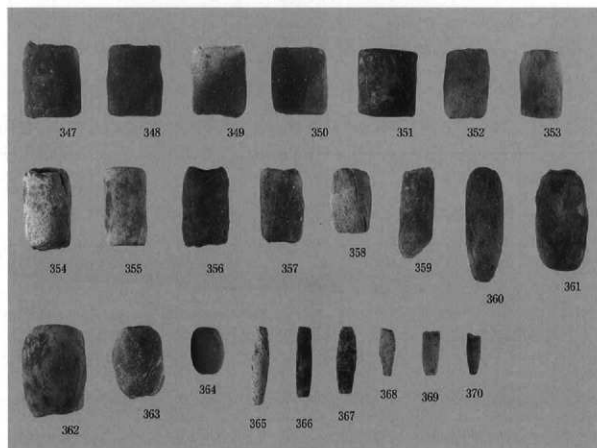
ST-2 出土遺物



S F-1・4 出土遺物



窯 体



土 錘

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわぶち いせき
書名	岩 淵 遺 跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第24集
編集著者名	大村秀典 河村悟史 林修司 岩崎仁志
編集機関	財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2001年3月23日（平成13年3月23日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いわぶちいせき 岩 淵 遺 跡	やまぐちけんほうし 山口県防府市 mmhsktd1205 大字台道	35206		34°03'18"	131°30'5"	000526 ～ 001117	4,500	県営ほ場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩淵遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡 竈跡 土坑 粘土採掘坑 溝状遺構 埋甕遺構	土師器 瓦質土器 陶磁器 石製品 鉄製品 銅銭	山口県内では初となる瓦質土器の窯跡を発見

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第24集

岩 淵 遺 跡

2001年3月

財団法人 山口県教育財団
編 集 山口県埋蔵文化財センター
(〒753-0073 山口市春日町3-22)

印 刷 児玉印刷株式会社
(〒755-0008 宇部市明神町3丁目4-3)
